
歌を失った歌姫

コウコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

歌を失った歌姫

【Nコード】

N9196H

【作者名】

コウコ

【あらすじ】

私は世界をまたに駆ける歌姫になるのが夢だった。だからって、本当に「世界」跨いでどーすんのさー！そんな彼女が会った、コメデイでもシリアスな新しい世界。そんなお話。

プロローグ

「私は私が死ぬことで、誰かを不幸にしたかったわけではないの。神様、どうか世界に癒しを――」

女神に愛された一人の娘が死ぬ間に祈ったのは、世界の平穏。落ちた涙は地面を伝い、神の樹は、彼女の死を悼む。

「むすめ、私の寵愛がお前を殺した。怨むか？」

「いいえ、いいえ。私はあなたに愛されて幸せでした。そして彼女もまた、あなたに愛されたかっただけなのに、どうして怨めましょう？」

「ならば言え。願いを、祈りを……」

「では、救いを。私の死は戦を生むでしょう。その戦は多くの人を殺すでしょう。」

私は、祈りたい。残されるあなたの子供たちの、幸せを」

「その祈り、聞き届けた」

彼女は死の間際に微笑んだ。そして永遠に目を閉じた。

第1話

「さわー今日一緒にかえろ」

冬も近い秋の終わり、夕暮れの時間は思ったより早く訪れた。さわの教室のドアをタカミが開け、大きい声でさわを呼ぶ。

教室の机にノートをひろげ、さわはシャープペンシルを手に唸っていた。

「ごめん、もう少し歌詞考えたいから先に帰って良いよ」

「わかった、ばいばーい」

タカミが教室のドアをバンツと音を立てて帰っていく。

タカミが誘う時間にすんなり帰ったことはそういえばない気がする。

歌詞を考えながら、頭の片隅でそんな風に思った。でもそれは仕方ないのだ。だって、教室は神様が降ってくる場所だから。

放課後の一人の空間は、本当に心地良い。

外でサッカー部と陸上部の声が聞こえる。風も音のない音を立てて、教室の中にはなんともいえない不思議な雰囲気漂う。

「やばっ、ひらめいた！」

放課後に教室で歌詞を考えると、不思議と良い詞が浮かぶ。

——ほら橙が満ちてきた 濃い紺色が追いかける

黄色い丸い月の下 低い空に星が瞬く

「うーん、詩的すぎるか」

だからさわは、普段こうして放課後に歌詞を書く。いつか自分が歌う歌で、世界をまたに駆けて活躍する。そんな夢を抱いている。

ピアノは幼稚園から、ギターも小学校高学年には習い始め、中学

に入ってから作曲も自分で手がけている。

夢は遠くない。そう信じる、純粋な高校2年生である。

こうして夢を追う若者は日本中にいるが、彼女が他の人と違うとすれば、それを本物にするまであと一歩だということ。彼女は正真正銘の天才で、すでに知る人ぞ知る歌姫なのだ。

「どーしよう。今週中には一曲仕上げてって奈良橋さん言ってた。曲はできたんだよ、曲は。後は歌詞だけ。むむむ」

ぶつぶつとつぶやくさわは、歌詞の書かれたノートの上で唸り続けていた。

奈良橋は、中学時代に路上で歌っていたさわをスカウトした作曲家だ。

「君の曲を、君の声で世界に発信したい」

そう言ってさわを口説き、自分の事務所に入るよう薦めた。

さわはそれ以来、奈良橋音楽事務所の一員だ。

しかし歌手としてではない。売れるまで顔出しはしないと決め、自分が作り歌った曲はインターネットを通じて世界に発信している。音楽事務所にはボイストレーニングと、マネジメントの仕方を学ぶために入った。最初は奈良橋さんについて回って、編曲の仕方、売するための手法、流行と自分の個性の織り交ぜ方など色々学んだ。

さわは奈良橋と出会って、歌を売るには歌うだけではダメなのだと気づいた。

売れる歌を歌うことを嫌う人もいるが、自己満足の世界においては人を動かす歌は歌えないとさわは気づいたのである。

そして今年の春、高校2年になったさわは、ひとつの集大成ともいえる曲を完成させた。147秒の短い曲。この長さで人の感動を作る、そう決めて、ネットで配信した。

曲名は「こもれび」降ってくる光の柔らかさと幸せに満ちた曲だ。

この曲は最初は連のように、気づけば知らない人はいないくらいに、広がった。

「彼女は誰」

「あの歌は何」

「こもれび」を聞いたある人はこう言った。

「神様は彼女のために木漏れ日を創造した。彼女がこの『こもれび』にたどり着くように」

そしてさわはそれ以来、「木漏れ日の歌姫」と呼ばれている。

しかしそんな歌姫も普段はただの高校生である。

「うーあー降ってこない。今日は神様が来てくれないよー」
唸りながらも「こもれび」を作ったときと同じように歌詞作りに没頭していた彼女は、一瞬夢の中にいるような感覚にとまどった。

——チカツ

窓の外に小さな光を感じた。

一瞬の瞬きの後、光は教室中に広がって彼女を飲み込んだ。
すぐに光はサーッと引き、のこった放課後の教室には、シャープ
ペンシルがカタンと落ちる音だけが響いた。

第2話

光に飲まれたさわは、自分がどうなっているのかわからなかった。一瞬閉じていた目を開くと、自分の目が見えなくなったように感じたがそれは違っていた。

目の前の空間は溢れる光で白く染まっていた。

その光は徐々に何かを形どるように漂いながら動いていた。ヒトのようで、獣のようにも見え、はつきりとしているようで、形のないうようにも見えた。

「なに……これ」

つぶやいた自分の声は、さわの聞いたことのないものだった。心臓が止まるほどの衝撃だった。

息の漏れるような掠れるような、そんな声。歌を歌う自分の声では決してありえない、汚い、醜い声。

自分は今、どこにいるんだろうとか、なんで目の前は真っ白なんだろうとか、目を開いた一瞬で頭をよぎったことはいくつもあった。しかし発した自分の声の醜さに、全ては飛んだ。

「やだ…やだあああ!!」

さわは泣き叫ぶ。その叫びすら自分の声とは程遠く掠れた醜い声をしていた。

さわはその場に崩れ落ちた。そんなさわの前で、光は相変わらず漂い続け、気づけばさっきよりはつきりとヒトの形をしていた。

「むすめが望んだのはヒトガタであっただか」

形を成した光はそうつぶやいた。

そして完全な人型をとったとき、光は光でなくなった。長い髪が

透き通るような銀色をした美しいヒトになっていた。

「おいお前。何を泣き叫び、何を泣いておる。お前は選ばれたのだ。女神の御子が、そなたを望んだ」

聞いたものを従わせるような、強い声であった。傲慢さと高貴さを内包した、上に立つものの声。

そこで初めて、さわは光がヒトになっていることに気づいた。

「え……」

「お前は世界を救うことを約束された」

「な、に……？」

つぶやく声は完全にさわのものではなかった。木漏れ日を歌ったあのやわらかく透き通る高い声はどこにもなかった。

「お前は我によばれた。むすめの願いをかなえるため、世界を救うため」

「わかんない、あんた何言ってるの」

さわは目の前に美しいヒトが、何を言っているのか分からなかった。

「お前は世界を救うのだ。成すべきことをせよ」

さわが混乱する中で、美しいヒトはもう一度言った。

「世界を救え」

美しいヒトはまた光になって、音もなく弾けた。

その勢いの中で、さわは眠気にも似た感覚が広がって意識が遠のくを感じた。

「選択が訪れしとき、お前は『お前』を選ばなくてはならない。

絶望の上に立つ光が、絶望の中に在る光のどちらかを……」

はじけ飛んだ美しいヒトがつぶやいた、予言めいた最後の言葉は、
さわに聞かれることなく消えた。

後には静寂だけが残っていた。

第3話

ドスンッ！！

さわは自分の体に走った衝撃で覚醒した。

腰と足に痛みを感じて、顔を顰めると遠くから声が聞こえた。

「あっちから音がしたぞ！」

反射的にさわは立ち上がった。

ぐるりと見回すと、そこは庭園のようだった。

さわがいる場所は庭園の中でも、少し開けた場所だ。水の音に振り返れば、そこには大きな噴水がある。噴水の周りはどうやら大きく丸く空間が取られているらしく、さわはそこにいた。

この空間からいくつかの小路が出ており、日本のコンクリ作りとは違うが、キチンと整えられているのが分かった。

さわは道の一つ選び走った。バラのような花が脇に咲き誇る優雅な小路。普段ならゆっくり歩いて歌詞の参考にでもしたいところだが、足音が近づいている気がしたため、今日のさわは全速力だ。

しかしその小路はくねくねと曲がり、一向に開けた場所には着かない。立ち止まって息を整えるとさっきよりも足音の数が増えているのがわかった。

——やばい！

再び走り出そうとしたさわだったが、ふいに腕を捕まれた。見れば、小路の脇の垣根から腕が生えている。ぐっと引っ張られた反動で垣根の反対側の道に出たさわは、しりもちをついた。そして腕を

つかんだ人を見上げ息を呑む。

——まるでガラスみたいな瞳 感情がないみたい

じつと見つめるさわに、男は顔を歪めてこういった。

「おまえ、何が目的でここに侵入した。回答によってはこの場で殺す」

殺す。その言葉を使ったことがないとは言わない。でもこの言葉を、こんなにも現実味を伴って向けられたことはない。

さわは奥歯ががたがたとなるのを感じた。

しかし男は掴む腕を離そうともせず、さわのもう片方の腕もとリ、両腕をねじり上げた。

「ラクテイ国の刺客か」

さわは精一杯首を横に振る。

「ではおまえはなんだ」

——なんだろう。私は何でここにいるんだろう。

問われて、初めて気づいた。

さわは自分がなぜここに居るのかわからないのだ。

でも分かることが一つだけあった。

おそらく今口を開けば、自分の耳にはあの醜い声が聞こえてくるだろう。

さわは恐ろしくて、何も言えなかった。

自分でも、この目の前の男が恐ろしいのか、自分の声を聞くのが恐ろしいのか分からなかった。

ガラスの目をした男に殺されかけて、自分が声をなくしたことを

思い出してさわは泣きそうだった。

そんなさを男はじっと見つめていた。

「リード、そいつ女だろ？ もっとやさしくしてやりな」

さわの耳元に「ふーっ」と息を吹きかけながら、男はこう続けた。

「もしかして俺のところに夜這いにきたのかもしれないぞ？」

「……」

さわと、リードと呼ばれた男は同時に硬直した。

そして一瞬の間の後、さきほどまでの殺気を消して、さをかばう様に自分の後ろへ引っ張った。

「ベガ様、そうは言いますが、女とて刺客である可能性もあるので。容易に近づかないください」

その仕草は、ベガに危ないと言いながら、さをベガと呼ばれた男から引き離すためのようであった。

「リード、お前そいいいながら、俺からその子隠してるでしょ？ ひどくね？ 俺がその子にとって危険ってこと？ 王様なのに？」

ベガが拗ねた振りをしてリードに文句を言う。

「……ベガ様が王であること、私とて十分承知しておりますよ。あなたに、敵味方を見分ける『祝福の目』が健在であることから疑いようもございません。あなたがそう仰るということはこのむすめは危険ではないのでしょうか？」

リードはじりじりとさわと連れて下がりながら続けてこう言った。「ならば女性を困らせることを生きがいとすると、大変面倒で迷惑な性癖をお持ちのあなた様から遠ざけるのは当たり前のことでは？」

それを聞いてベガは笑みを深くした。

「ふっ、まあ普段ならそれで正解かもな。でも今回はちょっと冗談ではすまないぞ？ その娘、『巫女姫の祈り』の具現体だからな」
そういつてすばやい動作でベガはさわの手をとった。

「サラネストへようこそ、姫君」

流れるような仕草で、さわの手のひらには口付けが落とされた。
そして続いて鳩尾に一発。

途中から会話についていけなくなったさわの意識は三度遠ざかる
こととなった。

「ちょっと！ なんで気絶させるんですか！」

「え？ だって今こいつ逃げようとしたもん」

「もんとか言わないでください！ 良い年した大人が」

「えー」

自分が気絶させられた理由を知って、「手にちゅーされたら普通にげるわ！」と言ってさわが激怒するまでには、一度夜を越えなければいけないようであった。

第3話（後書き）

感想や評価をいただけると嬉しいです。

第4話

昨日はつい怒鳴ったけど、まだ声を出すのは怖かった。

でもそれ以上に、ヘラつとした赤髪の男に笑いながら追い詰められるのも、このガラスみたいな目をした金髪の男に見つめられるのも居心地が悪くて仕方ない。

「さわ……柿崎さわです」

だから小さな声で名前を言った。自分の声は聞こえないふりをした。

もう、夕焼けは終わり、夜が近づいた。

ベガがさわを気絶させた後、二人は彼女を執務室へつれていくことにした。

巫女姫の祈り、それは女神が関係することを示している。

聞かねばならないことは多いが、扱いは丁寧にしなくてはならず、まさか牢屋に入れるわけにもいかない。リードはそう考えながら、すでに自分の主が彼女を気絶させているのだったと気づき頭を抱えた。

途中、さわを追い掛け回していた衛兵たちに、気絶したさわを見せながら捕獲したと伝え、リードが自ら尋問するというと、衛兵たちは静まりかえった。

「では持ち場へ戻れ」

リードの一言に蜘蛛の子を散らすように走り去る。

「魔法士長どのが……」

「あのむすめ、死んだな」

衛兵たちは走りながらそうつぶやいていた。

リードは魔法士長と同時に、この国の宰相を務めている。

とはいっても、魔法士長としての仕事が忙しく、普段宰相として与えられる執務室はあまり使われておらず、さわを寝かせるにはびったりであった。

女神に関係すると知れば狙われる。

ベガがそう告げたため、リードはこの少女をどのような立場で迎えるべきかを考えていた。まだ目を覚まさないさわを見て「今後のための手を打ってきます」とベガに言う。

「おう、行つて来い。あ、部屋と侍女は用意しろよ。あと待遇は……そうだなー后候補つてことで」

ベガが王として振舞うときに失策はないと知っているリードは「かしこまりました。数時間ほどで戻ります」と告げて、リードは自分の執務室のソファで静かに眠る彼女をちらりと見て、部屋を出た。

少女を迎える全ての準備を整え、リードは自分の執務室に戻ると、構図は数時間前と変わらずだった。

「ベガ様、『巫女姫の祈り』の具現体とは？」

まだ目を覚まさないさわを見やり、窓からじつと外を見つめていたベガに声をかける。

「女神に愛された巫女姫が、最後に残した祈り」

「だから、それはなんなのですか？」

「さあ？ なんでも女神がだーいすきな彼女の願いをかなえるために呼んだらしい。『救い』だとさ。今はそれしかわからん」

「それは、祝福の目があなたに告げたのですか？」

「そう。でもこれ以上はこの娘に聞かないとな。カルプとて万能ではない」

この赤い髪をした男の名は、ベガ・カート・ディ・サラネスト。

魔法を主な戦いの手段にするサラネスト国の、第十七代王である。そしてこの国の王には、受け継がれるものが在る。

「カルプ」と呼ばれる精霊だ。対外的には「祝福の目」と呼ばれ、ひとつの能力だと思われるが違う。カルプは智の精霊である。

彼らは王家に連なる血の中で、次代の王に最も相応しいものを選ぶ役目を負う。

王となるものは、ある日突然左目の視力を失う。それはカルプが、王の左目に住まうから。

ベガは十で左目の視力を失った。そしてその日に王の座に着いた。カルプを従えるサラネスト国は繁栄の一途を辿っている。祝福の目の力によって、魔法に優れ、戦に優れたサラネスト国の代々の王は、なによりも外交に優れていた。

しかしそれゆえに起きた悲劇もないとは言わないが。

と、語るとベガが大層素晴らしい王に思えるが、普段王と接するものたちの感想をまとめれば、いつもにやにや笑っていたずらを仕掛ける面倒な王様だ。

「とはいえ、リードもなんか感じたんじゃないの？ 普段のお前なら捕まえて、即動けなくして、自白魔法をかけて、『キヤーあんたそれでも人間かー！！』みたいなやり方ばかりなのに。なまぬるーくてお優しい尋問だったじゃん？」

からかう口調のベガに、リードは「また始まった……」とため息をつく。

それでもベガのにやにや笑いはいつこうに収まらない。

先ほどまでの真面目な話は終わりらしいとリードは感じ、御子姫の祈りとはなんであるのかを問い詰めることを諦めた。

「ちがいますよ。ただ、毛色が違うなと感じたので、殺すのはまずいと思ったのです」

そういうリードの声を無視し、ベガはなおも続けた。

「わかった！ お前こつというむすめが好きなんだろう？ 確かに肌は白いし黒い髪は珍しいし美しいな。いやーお前にも春が来たか。そうかそうか。コレ、お前にやろうか？」

こつこつと靴を鳴らしながらさわの前に立ち、頬をつんつんとつつくベガに、リードはあきれた顔をした。

「ベガ様、おやめください。仮にも寝ている女性にすることではありませんよ。というか、あなたのもものではありません」

そんな中、騒々しさで目を覚ましたさわは、ゆっくりとまぶたを開いた。

「あ、起きた」

二人はさわの様子に気づくといっせいに顔を向けた。

軽い調子のベガとは対照的に、リードは腰をかがめ、さわに目線を合わせて話しかける。

「先ほどは失礼いたしました。私はサラネスト国の魔法士長をつとめる、リード・キャメリです。女神によばれた方とは知らず、無礼を働きました」

「気絶させて悪かったな。でもお前が俺から逃げるからだぞ？」

リードを押しつけるように、今度はベガがさわの顔の前に現れ、笑いながら言う。

「俺、女に逃げられたのはじめてかも」

「ベガ様、それは言いすぎです」

金髪男の丁寧な挨拶に、赤髪男のふざけたセリフ……

さわは一瞬で覚醒し、目の前にあった赤髪男のキレイな顔に強烈なビンタを放った。

「いきなりちゅーされたら逃げるに決まってるじゃん！」

あまりの衝撃に軽くしりもちをついたベガは、呆けた顔をしたあとで大笑いした。

「リード、こいつおもしろい！ やっぱおまえにやるのやーめた」
「はあ……」

リードのため息はベガには届かないようであった。

「名前は？」

楽しそうにベガは言う。

「女神につかわされたあなたの、お名前をお聞きしてもよろしいですか？」

疲れた顔でリードは続けた。

そこではつとさわは気づく。

——えーっと、私はいま何をしたのでしょうか？

というか、この美形二人はなに？

ってかここどこ？

ふざけてはいるけど、なにやら丁寧な二人の態度に、さわは背中に冷や汗を感じた。

——いや、まさかね、確かによくある話ではある、うん。
……本の中では。

品の良い調度品の数々に、あきらかに現代風でない西洋風の顔立ちと格好をした目の前の二人。金髪の方は少し前に流行った魔法を使う少年と同じようなローブを着ている。

聞こえてくるのは日本語だけど、口とあってない。まるで吹き替えの映画のよう。

「名前は？」

「お名前は？」

じりじりと寄って来る二人に、私は混乱しながらもやつのこと
でこう答えた。

「さわ……柿崎さわです」

そして冒頭へ戻る。

第5話

「カキサキサワ、不思議な音だな」

さわの名前を聞いて、ベガがそう言っただけで笑った。胡散臭い今までの笑顔とは少し違って、さわは顔が赤くなる。

「あなたの国では、女性でも声が低いのですか？」

リードのふと思いついたとでもいいかげん問いに、それまでとは一転してさわの顔がこわばった。

——悪気があるわけじゃない。笑え！

さわはそう自分に言い聞かせて一瞬で笑顔に戻る。

「ううん……それは人による。へんかな？」

ベガはそんなさわの顔を少し不機嫌そうに見ながら

「俺は高い声よりも低い声の方がいい」

と言った。ベガが不機嫌になる理由がさわには分からなかったが、その言葉でこの声で話すことが少し怖くなった気がした。

ふふつと笑ったさわを見ながら、ベガはさわの名前について考えていたことを聞く。

「さっきさわと言ってから、カキサキサワと言いなおしてたよな。

その場合、カキサキが名前か？」

「ううん。さわが名前だよ。私の国では、名前が後なの」

そうさわが答えると、ベガたちはそれだけで、さわがどこから来たのかが分かるようだった。

「どうやら女神は世界を跨いだらしいな」

「では、あなたは異世界からやってきたのですね」

さわは目の前の二人が「異世界」と言ったのが不思議だった。さわの住む世界では、異世界の概念は本の中にしかない。

「なんで異世界ってわかるの？」

さわは知らない。サラネストがあるこの世界では、名前を後に言うことは絶対がない。名は女神によって与えられ、呼ばれば呼ばれるほどに幸福を呼ぶものとされる。

この世界では、尊いのは血脈で繋がれる姓ではなく、個を表す名だ。

名を後に呼ぶ。ただそれだけでこの世界の住人ではないと思うほどに、人々は女神を敬愛し、女神によって賜る名を大切にしている。

「この世界では、名前を先に名乗ります。他人と呼び合うときも、名前を呼ぶのが正しいとされます。ですからこのベガ様も王や陛下と呼ばれず、ベガ様と呼ばれるのです」

「そう、なんだ」

——ん？……あれ？　今おかしい単語が入っていた気がする。

「まああなたが王だということがどうかともあります」というリードの言葉に、ベガが「うわーひどー。俺泣いていい？俺こんなに立派な王様なのに」と言う掛け合い漫才は、さわには聞こえていないようだった。

自分の感性に引つかかる不可解な単語をさわが探索し終わり、驚きに目を見開いて大声を出したのは、ベガの泣き真似にリードが呆れてため息をついたのと同じだった。

「……えー！！ 王様？ あなたが！？」

急に大声で叫んださわに、二人は同時に振り向いた。

——やばい。またやった。この思ったことがすぐ口に出ちゃう癖やめたいのにー！

「いや、ゴメンナサイゴメンナサイ。まるで『はっ、あんたが王様？』みたいな口調で言ってゴメンナサイ。てかさつき思いっきりたいてゴメンナサイ。王様って知ってたらしませんでした。てかもうしないので許してください」

結論として、さわは床に頭をつけて謝ることになった。

当然土下座の文化がこの世界にあるわけもなく、それを見たベガは「なんだその新しい儀式！」と目を輝かせ、リードがそれをめんどくさそうになだめるのであった。

さわの興奮が収まり、ベガの土下座への興味が薄れたところで、リードは侍女を呼んで茶を持ってこさせた。

「遅くなって申し訳ありません。一応、女神に呼ばれたのだとあなたの口から聞くまでは、対応を決めかねていましたので」

さわの失礼な物言いとビンタは土下座の面白さの前にかき消されたらしく、二人から話が聞きたいと言われ、三人はソファに腰掛けた。

さわの右隣に赤い髪のベガ、向かいにリードが座るとタイミングよくノックの音がした。

音を立てずに入ってきた侍女は、3人に給仕をした後、リードの

斜め後ろに控えるように立った。

「お話の前に紹介しておきます。この者はネオ、さわ様のお世話はこの者が担当いたします。女神に呼ばれたあなたは貴いご身分となりますので、なんでもこのネオに申し付けください」

リードがそういうとネオがきれいにお辞儀をし、退出した。

そんなネオにさわは軽く会釈をして、それが意味するところを理解してリードにたずねる。

「それって、ここに住むってこと？ 貴いって、本当に女神に呼ばれたかも分からないのに」

日本に住むさわには、誰かに世話をされるとするのは本当に選ばれた一部の人だという認識があった。当然自分がそれにあたるとは考えていない。

——ていうか、女神女神って、この人たち私のことその女神がよんだんだってすっごい信じてるけど、そんなのわかんないじゃん。

考え込むさわにベガが「心配しなくていい」といった。

「おまえが女神に呼ばれたのは間違いない。女神のわがままにつき合わされたんだし、きちんと面倒は見る」

ベガの「女神のわがまま」という言葉に、さわは小さなとげを感じたが、ベガは何も言わなかった。

「ではあなたは、光の空間を通ってこの世界に来られたのですね」

さわはあの放課後の教室から始まった不思議な体験を話した。

「うん。高校の教室にいたら急にチカッとして、光に飲み込まれた。そしたら白い空間にやたらキレイな人がいた」

「コウコウって？」

ベガが聞きなれない言葉をさわに問う。

「高校は学校の種類だよ」

「へーおまえ学校にいつてたの？ 何を学んでたの？」

高校に興味を引かれたベガがそこを追求するが、「ちよつと黙つててください」と言われてリードに言われ「うわーひどっ」とか言っていたが、リードは気にせず黙殺してさわのほうを改めて向いた。

「おそらく、その方が我々が女神と呼ぶ方です。こんなふざけた王ではありませんが、ベガ様は我々では知りえないことを知る能力をお持ちです。『祝福の目』は、女神があなたを呼んだのだと告げますので間違いないでしょう。その方と会話はしましたか？」

さわはあの空間で、あの美しい人が自分に向けた言葉を思い出して息を呑む。

「……うん、したよ」

この世界での女神信仰は、古いものだ。女神は300年前まで確かに人間と共に在ったと史実では言われているが、女神を見たもの、ましてや会話をしたものはこの300年間一人もいない。創世神話の最後にならず記述されている、300年前の出来事のせいだと言われている。女神はまだ人間をお許しになってはいないと。

魔法とは、女神に言霊を預け、その言霊を女神が具現化したものとされている。魔法を扱う一人として、さわが口にする女神の話に自分が興奮するのを感じた。リードはさらに前のめりになってさわに問うた。

「その方はなんと…？」

深呼吸を一つして気を落ち着かせるさわを、ベガが真剣な表情で見ているのがさわには分かった。さわは何でだろうと不思議に思う。そしてさわが口を開こうとした瞬間、ベガが口を開いた。

「世界を救え……だろ？」

ベガの言葉が、自分が今まさに言おうとした言葉であったことに驚いた。リードはさわの驚きで、ベガの突然の言葉が、女神の言葉であったことを知った。二人の驚きを見て、ベガはにやりと笑う。

しかしその笑みを一瞬で消し去り、ベガは纏う空気を「王」としてのものに変えてさわにこう言った。

「この一言で、そなたが巫女姫の祈りであることが証明されたな。かつて巫女姫と呼ばれた女神の御子は、命の火が消える瞬間に世界の平穏を願ったとされている。そなたはその祈りを体に宿すもの。女神の御子の祈りそのもの」

その空気に、さわは身震いした。

「そなたは女神に選ばれしもの。その存在は稀有にして異端。今はラクテイとの戦も間近に迫ってきている。おそらくこの先多くのものが、そなたを害そうするだろう。しかしここはサラネスト国の王宮。サラネストの国とベガの名にかけて、そなたを守ると誓う。賓客として迎えよう、さわ」

名を呼ぶのはこの世界に在る事の証。

ベガの言葉を受けてリードも続いて言う。

「私も守ります。女神に選ばれたさわ様を、リードの名にかけて」

さわは不思議と涙が出た。さっきまで軽い口調でへらへらした顔をしたベガを、正直「なんだこいつ」と思っていた。金髪男は急に丁寧になったけど、最初殺しそうな冷たい目でさわをみてことを数時間やそこらで忘れられるわけない。

怖かった。知らない世界に放り込まれたさわは、混乱で泣いてこそいなかったけれど、怖かったのだ。

二人の言葉はふしぎとさわの心にすーっと染み込む。

「はい……」

ベガの言葉で、さわはやつと泣くことができた。

自分の声を失って、しわがれた醜い声でさわは泣いた。

世界を救うとか、いまはまだよく分からない。

二人はきつと、さわが女神に選ばれたらしいからこうして接してくれるのだらうと思った。

しかしそれでもさわは、ベガとリードに会えてよかったと思った。

第6話（前書き）

やっとコメディ色を出せました。

閑話休題は一度下げます。

見れた方はラッキーということでは

第6話

ゆっくりとした仕草で、男がさわの手を取る。

今日は前髪を上げており、凛々しい姿に軍服が映える。

悔しいから、絶対に見惚れない。

そんなことを考えながら、さわも負けじとゆったりとした動作で微笑む。

薄い青のひらひらしたドレスは、さわの足に絡んだが、優雅に整え、足をまた一歩進める。

男に少しの体重を預けて、淑女らしくたおやかに歩く。

「さわ」

優しい声がわたしを呼ぶ。

さあ、歌が始まった。

静かに泣くさわを、二人は泣き止むまで待っていた。

「さわ様、今のあなたに、このようなことをお話しなければならないことを申し訳なく思います」

冷め切ったお茶を口にして、ようやくおちついたさわに、リードが申し訳なさそうに口を開く。

「この世界には大国が2つ、うち一つがこのサラネストなのですが、

この両国の間には常に争いがあります。始まりがいつからかを覚えているものはいないくらい古くから続いています。今も国境近くでは小競り合いが起きていますが、大きな戦はここ十年おきておりません」

ならば今は平和ということでは？ と考えたさわは、リードがなぜ苦い顔をするのかが分からなかった。

「おつきい争いがなかったら安心してないんだよねー」

そのギモンを掬い取るかのようにベガが軽い調子で答える。

「なんで？」

「今は火種がくすぶっている状態なのです。抑圧された状態と言ってもいいかもしれません。なにかのきっかけで箍が外れば、仮初の平和が長かった分大きな争いになるでしょう」

「そう……大変なんだね、この世界も。でも何のために争っているの？」

「それも、分からないほどに長く争っているのです。ただ、女神の寵愛を得るためだと伝えられています」

「女神の寵愛？」

「そうです。ですからあなたが女神に呼ばれたとなれば、ラクティはあなたを手に入れようとします。手に入らないと分かれば殺すこともいとわない可能性もあります」

「そんな……じゃあどうすればいいの？」

気づけば呼ばれた異世界で、やっとその事実を受け入れられてほつとしたのも束の間、自分はなにやら危機らしいと分かり、さわは身震いした。

「あの、本当に申し訳なく思っているのです。わかってください……」

おびえるさわに、申し訳ないというよりは、なにやら続く言葉を口にするのが嫌がつているように見えた。

「リード、ちゃんと言えよ。『ベガ様の后候補として王宮に滞在してください』ってな」

まるで獣が舌なめずりをするかのように上機嫌なベガが、今までで最上級ににやけた顔をしながら笑った。

「は？」

戸惑うさわにリードが下を向きながら言った「本当にすみません」と言う言葉は、間違いなくベガの言葉を肯定するものだった。

曰く、ベガの後候補であれば護衛を引き連れていてもおかしくない。

曰く、女神関連を隠すのであれば、急にあらわれたさわが身をおく場所として後宮ならあやしまれない。

「つまりベガの後候補は後宮にいつぱいいて、しかも急に女が増えることに違和感をおぼえるものはいないってこと？」

さっきまでの泣き顔や怯えはどこへいったのか、さわのこめかみはぴくぴくと震え引きつっていた。

「迅速な理解、感謝いたします」

再度頭を下げたリードの言葉は、肯定だった。

さわにノーの選択肢はない。これは決定事項なのだ。

「あなたは必ずもとの世界にお返しいたします。ですがご自分の世界に帰ることの出来る方法を見つけるまで、おそらく時間がかかるでしょう。その前にやみくもにあなたのお立場をさらせば、それだけ命が危つくなります。女神に呼ばれたあなたを守るため、どうかよろしく願います」

世界を救えと女神は言った。

おそらく世界を救えば、元の世界に帰れるのだろっ。そう、さわも感じている。

だからリードが言った帰る方法とは、世界を救うとは何かということそのものを指している。

しかしそれが具体的になんであるのかが、いまさわにも、この二人にも分かっていない以上、さわの命を危険にさらすわけにはいかなかった。

リードの言葉の意味を、さわは十分に理解していた。

——最初、争いの話が出たときには戦えと言われるのかと思った。けどそれは違って、どっちかという女と女の戦いが待ち受けているような気がしてならない。

でも、私は運が良いのだと思う。

勝手にこんな世界に呼ばれたけど、こうして助けてくれるひとと会えたんだから。

きつと帰れる。

そうよ、何より、生活の心配はしなくていいんだから！！

柿崎さわ 17 歳。

立てば芍薬座れば牡丹。歌う姿は百合の花。

誰がいったか知らないが、艶のある長い黒髪に白い肌、ピンクの頬に透き通るような美しい声。いまはその声はないが、それでもさわはどこぞのご令嬢にしか見えない。

しかしそれはしゃべったり動かなければという但し書きがつく。

思ったことはすぐ口にするし、短気なためすぐに手が出る。
ある「特別」なときを除けば、さわは無駄美人だった。

父親は仕事なしの甲斐性なしで、母親はせつせとパートにでているたくましい人だ。最近こそ奈良橋の事務所でさわ自身がバイトをし、「こもれび」が売れたことで生活は楽になったが苦節16年。小学生の時からスーパ―の特売に走った経験は伊達ではない。

「分かった。私に出来ることはする。だから、ここにおいてください」

働かざるもの食うべからず。

さわは母の教えを異世界でも忠実に守ろうと決意した。

気づけば着ていた制服は、庭園を走りまわってぼろぼろで、足には擦り傷が出来ていた。

夜は更けて、窓からは月明かり。

部屋には魔法の光はあれど、すこし薄暗さが残る。

そんな中で、赤い髪の男と金髪の男に、普段のさわに似合わない綺麗な動作ですつと頭を下げた。

これははじめだ。

この先、生活の面倒を見てもらうのだから、これくらいは我慢し

なければならぬ。

そうして与えられた役目が、さっきからずーっとずーっとにやにや笑って「いやーさわがおれの后かいいいねー！」と笑っている男の后候補だとしても……！

第7話

さわが夜の庭園で二人に気絶させられ、后候補として後宮に上がることを承諾したときには、もう夜の帳は落ちきっていた。

「今日はゆっくり休んでください。明日、詳しいことは説明いたします」

リード自ら、さわを部屋へと連れて行く。初めはベガが連れて行くと言ったのだが、

「あなたに任せると危険ですので」というリードの一言で却下され、しぶしぶ自分の部屋へ戻って行った。

「最初にお会いしたときの無礼をお許しいただけますか？」

ここですと案内された扉の前に立ち、さわがノブに手をかけようとしたときだった。

「え？」

「最初にあなを殺そうとしたことです」

さわが振り向くと、リードは目に見えて落ち込んだ様子でこう続けた。

「私が近づくと、体が一瞬強張っていらっしやるのが分かったので、リードが大きな体でしょぼんとなる様子が、まるで実家で飼っている犬のようで笑ってしまった。あいつもいたずらをしては、さわに見つかるたびに大きな体をちぢこませてこんな顔をしていた。」

「大丈夫。そのことは気にしてないです」

そう笑って言うと、ほっとして「では」と去って行った。

さわが部屋に入ると自動的に明かりがついた。時間が時間だから、ベッド脇のオレンジ色の小さな光が一つだけ。

3人は余裕で寝られそうな大きなベッドに、「さすが王宮」とすこしビビるが、眠気はそれ以上で、ためらう前に倒れこむように寝転んでしまった。

「そのことは気にしていない」

つい、いやみな言い方をしてしまったとさわは反省する。これではまるで「ほかの事」は気にしているようではないか。

事実、さわが何より堪えているのは「低い声」だと言われたことだった。

高くて透き通る声は傲慢だった。

顔や髪を褒められるよりも、声を褒められるのが嬉しかった。

なんか、疲れた。

本は好きだし、ファンタジーも好きだった。

家が貧乏だから豪華な暮らしに憧れたりもした。

いまの自分の境遇は、

声さえ前のままであれば、楽しめたかもしれない。

「あいつは、低い声がいいって」

さわの中でのベガの認識は、後宮の話あたりで「ニヤニヤわらう女好き」となっている。したがってあいつ呼ばわりで十分と認定。

「ふふっ、ちょっと安心したかも……」

そうつぶやきながらさわは眠りに落ちて行った。

第8話

さわが目を覚ますと、そこには昨夜会ったネオがいた。

「おはようございます、さわ様。もうお昼もとうに過ぎましたわ。夕べはお疲れでしたので仕方ないとはいえ、そろそろ起きていただきますか」

体を起こすと、ネオが顔をしかめたのがわかった。

「昨夜はそのような格好で眠られたのですか？ 寝巻きを用意してありましたのに」

ネオの顔の先を見れば、ベットの脇のテーブルには柔らかそうな生地寝巻きがきちんとたたまれておいてあった。

「あ、ごめんなさい……」

ネオにため息をつかれてさわは少し落ち込んでしまった。確かに泥だらけの制服で寝るなど、いくら眠かったとはいえやりすぎた。

「数刻後に宰相がいらっしゃいます。まずは体を綺麗にしましょう。それから軽い食事を用意します。その後でこちらにお召しかえをしていただきます」

そういつて見せられたのは薄い黄色の腰周りが細いドレスだった。「さわ様は大層細くていらっしゃるのでコルセットは必要ないですよ」

人に着替えを手伝われるのはこつも恥ずかしいものだったのかとさわは実感した。

お風呂では、寝台のようなものに横たわるように言われ、なんのためにと思いながら寝転べばあちこち触られ悲鳴を上げてしまった。

——思ったより、后候補つてめんどくさい？

しかしこれはほんの序の口であったことに、後でさわは気づくの

であつた。

ネオがさわの髪を結び終わり、ダイヤのように透明に輝くネックレスを留め終えると、ちょうどノックの音がした。

「どうぞ」

さわの返事に、リードが「失礼します」と入って来る。あ、宰相つてリードのことなんだ、とさわは今頃気づく。

「昨夜お話したとおり、今日から後宮の部屋へ移っていただきます」
「え？　ここは違うの？」

「はい、ここは客室です。後宮は離れの造りになっておりますので、そちらへ移っていただきます」

「そーなんだ」と軽く返すさわに、時間がないのでと前置きし、手を取り歩き始めた。

「今から？」ときくさわにリードは頷き、歩きながら今から向かう後宮について説明し始めた。

「サラネストの後宮には正室や側室はおりません。今いる姫君たち全員后候補と呼ばれます」

「候補？」

「そうです。サラネストでは、子を産まない限り后にはなれません。一番最初に王子を生まれた方が正室になります。ベガ様にはお子がいまだいらっしやいませなので、みな后候補です。候補である限り、身分は問題ではなく、どの方も等しく同じ扱いとなります」

「何人くらいの方が後宮にいるの？」

「ざっと50人ほどでしょうか」

「げえ」

顔をしかめるさわに、リードは笑った。

「とはいえ、大臣が後の座を狙って送り込んだ貴族の娘や、友好のために属国から勝手に連れてこられた方がほとんどですよ。ベガ様は女性が好きでいらっしゃいますが、後宮にはあまり足を運ばれませんので」

「そうなんだ。ベガが手当たり次第手を出してるのかと思った。」

「違いますよ。そして先ほど身分に差はないと言いましたが、それは建前です。あなたは私の推薦で後宮に上がる形となりますが、遠縁の娘で貴族としての位は中程度です。後宮の中では低い方になります。そのほうが目をつけられなくてすむと思われます。くれぐれもおとなしくお願いいたします」

「失礼ね、つまり目立つなっでことでしょ？ 大丈夫よ」

ひらひらと手を振るさわに、まあさわは美しいが今の様子ならそんなに目立つこともなかつと、リードはそれ以上口にはしなかった。

あとでもっときつく良い含めておくべきだったと、後にリードはこのときの自分を大いに反省することとなる。

二人は廊下の先にある、鎖で閉じられ、鍵のかかった黒い大きな扉にたどり着いた。

「ここが後宮へ続く扉です。この扉の向こうには中庭があり、庭の先にまた同じ白い扉があります。この黒い扉から先は女の園です。

ベガ様を初め王族の男性しか踏み入れることの許されない場所です」

「リードも？」

「私もです」

宰相すら入れない、王族専用の後宮。

「西洋風大奥つてどこか」

さわがつぶやいた言葉をリードは理解できない。

「閉じ込めるわけではありませんが、ここであればあなたの身を隠

すことも出来ましょう。来るべき時まで、ここで身分を隠して住んでいただけますか」

いちいち丁寧な人だとさわは思う。

「大丈夫だよ。ちゃんとする」

さわの返事にリードは小さく頷いた。

「白い扉を抜けると案内係がおります。その者がさわ様をお部屋までお連れします。部屋には信用の置ける侍女と護衛をつけましたので、なにかありましたら彼らにお伝えください」

そう言つてリードは黒い扉の鍵を開ける。ギョッと見た目以上に重そうな音を立て、扉は開いた。

「ご健闘をお祈りします」

扉が閉まる瞬間に、リードが言ったこの言葉はどういう意味だったのか。

振り返ったそこには、扉は既になかった。

第9話

通ってきたはずの黒い扉は、ただの壁になっていた。

さわの目の前には一直線に伸びる広い白亜の通路がある。柱には美しい彫刻が施され、両脇は様々な花が咲き乱れて美しい。

しかしその通路の長さが尋常ではなかった。軽く数百メートルはあるだろうまっすぐな道。

——いや、まじ意味わかんないかも。

ここがどんな空間であるのかが把握できず、さわは焦る。とりあえずリードの言う白い扉を探そうと通路を歩き始める。10分ほど歩いてやっと、かなり遠くにそれらしきものを見ることが出来た。

1時間は歩いただろうか、いやもったかもしれない。

やっと白い扉の前に立ち、息を吐いた。時計を持たないさわは、体内時計で歩いていた時間を考えるが答えは出ない。

息を整えてノックをしようとした瞬間、扉はさわの手が触れる前にひとりで開いた。

驚いたさわに扉の向こうから声がかかる。

「どうぞ、さわ嬢。リード魔法士長の遠縁の娘とか。2刻とはずいぶん早いお着きだ。回廊に気に入られたか」

ひとりでに開いたと思った扉は、よく見れば小さな少女が扉を開けていただけだった。

「わたしはカノン。ここの案内役をつとめている」

そしてその少女の向こうにはきらびやかな世界があった。
開いたその先は玄関でもなんでもない、大広間だった。

無数のシャンデリア、鳴り響く弦音楽。

むせ返るような花のにおいは、女性たちがつける香水だった。

「お披露目は派手に。そうベガ殿からおおせつかつておるゆえ、宴を開いたぞ」

見た目に似つかわしくない古めかしい喋り方をした少女は、さわの手を引いて大広間をぐんぐんと進む。いくつものテーブルにはおいしそうな料理、回る給仕たちの手にはお酒が乗っているのがおいで分かった。

「ここにおるものは全員后候補とその侍女じゃ。今日は久方ぶりにベガ殿が来るとのことではみな張り切つてな」

少女に手を引かれるさわをみて、周りの女性たちが次々と振り返り、そしてこそこそと話し始める。

「あれが新しい候補？」

「どうせ卑しい身分のむすめよ」

「宰相の遠縁ですって」

大広間の向こう、階段の上の少し高くなっているところに、赤い髪のにやにや笑いを見つけて、さわはやっとこれがあの男のせいだと理解した。

おそらくベガがさわを困らせるために、このような宴に突然放り

込んだのだろう。

カノンは女性たちの陰口が聞こえないかのように、間近に迫るベガのもとへ連れて行こうとした。しかしその瞬間、誰かの足がさわのドレスを踏んだのが分かった。カノンに引つ張られたさわは横のテーブルを引つ掛けて盛大にこけてしまった。

その瞬間、陰口が失笑と混じって大きな音になる。

さわの顔がぱつと朱に染まった。

「おお、すまん。急ぎすぎたか。ベガ殿に早う連れて来いといわれてのう」

カノンは自分が引つ張ったせいだと思ったのか、謝りながらさわに手を伸ばして起こそうとした。

しかしそれは叶わなかった。

カノンの手をつかもうとしたさわは、自分の頭からぼたぼたと水滴がたれるのを感じた。

「まあ、卑しいむすめね。転んだ上にテーブルを倒し、その上頭からお酒を飲むだなんて」

真つ赤なドレスをきて流れる金髪を垂らす一人の女性が、ひっくり返した空のグラスを手に笑っていた。

「まあガーネット様ったら」

取り巻きの娘たちは、さわの姿を見てまた笑った。

ガーネットと呼ばれた女性はベガに向き直り、自分がしたことになんの罪悪感も感じていないかのようにこう言った。

「ベガ様、酔狂がすぎますわ。このような王の御前でドレスに足を取られて転ぶ娘など、后候補に相応しいはずありません」

「俺には誰かがドレスを踏んだように見えただが？」

言葉だけ聞けば責めているようだが、そんな言葉とは裏腹に楽しそうにベガは言う。

「まあ、ベガ様。気のせいですわ」

ころころと鈴が鳴るような声で笑うガーネットに、さわは力チンときた。

表情でそれが窺い知れたのか、ベガがさわを煽る。

「なんだ、さわ。なにかいいかげじゃないか？」

——この男、まじむかつく

瞬間、さわは自分のスイッチが切り替わるのを感じた。

歌うときと同じ、血が上った頭から興奮が冷めていくのがわかる。

「着替えを」

まだしりもちをついたままだったさわが顔だけを上げてベガにこ
ういった。

「着替えを所望します」

低いその声は、少しかすれているのに通る声だった。
かつて持っていた透明さや高い声は失われて尚、力のある声。

ざわめきが一瞬広間から消えた瞬間、どこからか現れたネオがさ
わの手をとった。

「御前失礼いたします」

ネオはそう言ってさわを大広間から連れ出した。

第9話（後書き）

1 刻は30分程度だとお考えください。

評価や感想をいただけると、嬉しいです。

第10話

通ってきた白い扉とはまた違う、一回り小さな茶の扉を抜けて、二人は大広間を出た。

朝ネオが着付けたドレスはお酒の染みがついているし、髪はけきたいきおいで解れていた。

「さわ様、よく我慢なさいました。あの方はわが国の中で最も力を持つ属国の一の姫ガーネット様。新しい方が入られるたび、こうして新入りの方に嫌がらせをなさっているのです。あそこで争わなかったのは賢明な判断です」

うつむき、ただ歩くさわが泣いていると思ったのか、ネオはメガネをかけた厳しい顔つきからは意外なほどに優しい声で言った。

「このまま宴には戻らずに休んで結構ですよ。ベガ様には『さわ様は体調を崩されました』とお伝えしますので」

さわに与えられた部屋に着いたのか、扉を開けながら、ネオは後ろに立つさわに言った。

しかし返ってきたのは意外な言葉だった。

「薄い青のドレスはある？ 背の開いた、でもいやらしくない程度に露出は少なめのものだと面白いわ。裾は足にまわりつくような、こうひらひらした長めのドレス。品の良い銀の靴も用意して。ヒールは高いものを。あとちいさなピンはある？ できるだけたくさん。あとは化粧道具も用意して」

さわはさつさとよごれたドレスを脱いでいた。

啞然とするネオに「早く」と急かす様は、思わず背筋が伸びるほどの威厳があつた。

しかしさすが長年侍女を務めるだけのことはある。すぐに我に返り、さわが所望したものを次々と並べて行く。

さわは、鏡の前に座り髪の毛をいじり始めた。普段のさわはストリートだが、先ほどネオに軽く巻かれていたため今は緩やかなカーブを描いている。その髪を半分掬い上げ、複雑な形に編み上げながらピンでどんどん留めていく。

そして化粧道具を開き、見慣れない道具で化粧を施して行く。ネオに化粧を施されたときに見ていたため、大体のつかい方は覚えた。

さわは一度見たものは忘れない。

ネオよりも繊細に、大胆に色を使いながら、鏡の中の自分を清楚ながら妖艶な女性に変えてゆく。

最後に紅を引き、すっと立ち上がってドレスに手を掛けた。ネオが後ろに立ち、ドレスを着せてゆく。

歌は演じなければ歌えない。

これは奈良橋の持論だった。

プロの歌い手はどんな歌でも歌えなければならない。と奈良橋は言った。

歌に載せられた歌詞が、思いが、全て自分の経験したものだとは限らない。

でも、歌うからにはそれを真実に昇華させる必要がある。

「どんなものでも、挑戦してみなさい。知っていればそれを歌うのは簡単だ。でも若いがゆえに知らないことも多いだろう。それでもどんな歌でも歌えるように、演じなさい。その歌の主人公に自分をするんだ。演じれば、それが真実になる」

「それに、自分をよく見せるよう努力しなさい。日本では売れるために見た目は欠かせないよ」

それからいろいろなことに挑戦した。

どんな自分にもなれるように様々なことを勉強した。

必至こいてバイトをしてお金を貯めては、お茶やお花や武道などの習い事につき込む日々。

奈良橋が「先行投資だ」と言って、作る曲を高く買ってくれるようになってからは、一人ヨーロッパを旅をしたり、ハンググライダーで空を飛んでみたり、ダイビングで海をもぐったりもした。

自分をよく見せるためにファッションの勉強もした。

自分を一番美しく見せる服、髪型、化粧、仕草。

しかしそれはさわの知識を増やしたが、知らないものを歌うところまではいかなかった。

そんな時、日本である舞台を見て、ある女性の一人三役の演じ分けに惚れこんだ。

まったく違う表情と、性格。その人が生まれ育った背景までも、にじみ出る雰囲気演技分けてみせる彼女の舞台を見るために、日本中を3ヶ月追い掛け回したこともある。根負けした彼女について半年劇団の稽古に通った。そこで「演じることそのもの」を学んで

初めて、経験したことのない知らないことを、演じて歌うところで昇華できるようになったのだ。

そこからのさわの歌の上達はすさまじかった。

知っていることも、「より知っているように」「演じて歌う。

知らないことは「知っているかのように」「演じて歌う。

さわは歌うとき女優になる。

さわがさわでなくなつて初めて、どんな歌も歌える。

——やつてやるわ。

私は馬鹿にされるのが、歌をけなされることの次に嫌いなのよ！！

そう決意して、手のひらに爪のあとがつくくらいにぎゅっと握つて、「誰よりも美しく、賢い女性」を思い描く。

そしてひとつ微笑むと、それは完成した。

第11話

扉を開けるその動作からもう、先ほどのさわではなかった。ネオは完成された女性を見て、後宮にお連れする際に自分が施した化粧も、服も、彼女を最高級に際立たせるものではなかったのだと知った。

まだまだ勉強が必要だと、ネオは、一人大広間へと入って行った彼女を見て呟いた。

さわが出て行ってもう2刻、先ほどのさわの様子に驚いた女性たちも、すでに自分を取り戻し、ベガの寵愛を取り合うことに夢中になっていた。

ベガは女たちの様子を、いつものように高いところからただ見ていた。

そんな中音もなく開いた扉から、一人の女性が歩いてくる。

まるで、風が歩いているようだった。

ずっと頭の前からつま先まで伸びた姿勢は美しく、薄く蒼いドレスが歩きたびに細い肢体に絡む。

漆黒の黒い髪はハーフに上げられ、髪は複雑に編まれながらも甘やかな雰囲気壊さない美しいものだった。濡れた様な黒い瞳は、視界にベガを捕らえてまっすぐに進んでくる。

ゆっくりと、優雅に。

周りの喧騒がぴたりと止んだ。
初めは誰も、気づかなかった。これが先ほどの広間で失笑を浴びた卑しい娘だと。

この女性は誰だと考え、そして初めて気づく。
今ここにいる見慣れぬ娘など、先ほどの卑しい娘しかいないと。

気づけば音楽も止んでいた。

さわは先ほどたどり着かなかった高い場所へ向けて、ゆつくりと歩を進める。

ベガが座るのは広間よりも少し高くなった場所だ。

さわはその階段の少し手前で立ち止まって、小首をかしげた。
その様子は、さも困ったとでもいいかげんな様子。

さわはまたゆつくりとベガに視線を向け、階段をちらりとみてまたベガに視線を戻す。

「おもしろい」

そう笑いながら言って、ベガは立ち上がる。誰も身動きが出来ないこの広間で、何者にも縛られないベガが階段を下りる。

そしてさわの前にたち、ゆつくりと手を差し伸べた。

さわはそこで初めて微笑を浮かべてベガの手をとる。
よく見れば、昨日の格好とは打って変わった凛々しい軍服姿。前

髪をあげた先に見える瞳は思ったより澄んでいて、思わず見つめてしまう。

——でも悔しいから絶対に見惚れてやんない。

「さわ」

優しい声で、ベガはさわを高いところへと導いた。

それに応えるように今までで一番の笑みを向け、彼の耳元へ顔を寄せる。

その様子が分かったのか、彼も立ち止まって膝を曲げてみせた。

ほんの小さな小さな声で、さわは男に愛をささやく。

「あんた、女の趣味悪すぎ。このくされ野郎がつ」

それを聞いたベガが、珍しく素の表情で驚いたのが分かってさわはスッキリした。見下ろす広間で、ガーネツが顔をぽかんとしているのが見えた。あのレベルでは競い合うまでもない。貧乏庶民をなめんなよつ。

ふっと笑うその仕草さえ、美しく賢く見えるように演じる。

満足したさわは、さあ部屋へ帰ろう！ とベガの手をあくまでも自然にほどこき、振り返って今上ってきたばかりの階段を下りようとした。

すると一瞬でひざを救い上げられ、次の瞬間、お姫様抱っこをされたさわはベガにキスされていた。

それは広間の女たちを覚醒させるには十分で、悲鳴が上がった。

「今夜はこいつにする」

キスされた衝撃にさわが固まっている間に、ベガはさわを抱いたまま大広間を後にした。

第11話（後書き）

私は小説を読むとき、続きが気になって仕方がないタイプです。
なので割りと荒い文章のままでも上げてしまいます。

ちよこちよこ直しが入るとおもうので、たまに遡って読んで頂けると、矛盾が少なくなっていると思います。

第12話

大広間から出て扉が閉まり、廊下をコツコツとベガは進む。

今通った扉は先ほどまでとは違う扉で、この廊下もさわが部屋に戻ったときよりも豪華だ。この先は王の部屋へと続いており、大広間の喧騒は既に届かないところまで来ていた。

廊下の途中、ベガが先ほどまでの一連の出来事を思い出して笑っている、急に下からアツパーを決められ、さわを抱いたまましゃがみこんだ。

しかし今しがたグーで人のあごを殴ったとは思えないほど、顔を真っ赤にしているさわを見て、ベガは満足そうな笑みを浮かべる。

「なんだよさわ、照れんなよ」

さわを先ほどまでよりもぎゅっと強く抱く。

「き、きゃああああ」

さわが悲鳴を上げて腕の中でもがくのを見て、ベガはますます嬉しそうに笑った。

「俺にビンタはるかと思えば、ドレス着てこけるし。こつゆう社交の場慣れてないのかと思えば、着替えてみたら雰囲気から様変わりか。あげく俺のエスコート強請るしな。おもしろすぎだろ。しかもその格好、誘ってんの？」

深いスリットが入ったドレスは、ベガに抱きかかえられて太ももまで見えている。

「ちっちがうっ」

ぱっと手を伸ばしてスリットを隠そうとするが、抱きかかえられ

たままではそうもいかないようだった。

本当に、おもしろいやつ。

ベガは腕の中にいるさわを見て思う。

ほんのいたずらのつもりだった。

どちらにせよ、後宮に入るならば候補たちにお披露目しなければならぬ。ならば、とカノンに盛大にせよと告げたのは、驚いた顔が見られればいいなと思ってやった出来心だった。

事実、この嫌がらせの発信源がベガだと気づいたとき、さわの顔は驚きつつも嫌そうな顔をした。ベガはそれを見て、大層満足していたのだ。

しかし、それで終わりではなかった。

部屋を退出するときに見せた声も、その後現れた彼女も、この2日間、ベガが見てきたさわではなかった。

リードあたりがこれを知ったら、「巫女姫になにするんですか！」「と怒鳴るだろうなと考え、「さわらないでよーおろしてー」と叫ぶさわを見る。

腕の中の女性は、先ほどまでのオーラは消えている。それでも、記憶にはさっきまでのさわがいる。

初め庭園で見たときには、美しいが細く、まだ子供だと思った。女神に関係していると知って、余計にいじめたくなった。

それがどうだ。結局驚いた顔をしたのは俺だったってわけだ。

良い意味で期待を裏切られ、ベガは「これからこいつで退屈しないな」などと不謹慎なことを考えながら、嫌がるさわの太ももに触れようと手を伸ばした。

しかし嫌な予感を左目に感じて、さわを抱えて近くの柱に隠れる。その一瞬後、二人が先ほどまで立っていた位置には氷の矢が突き刺さっていた。

あたつていれば、ベガはともかくさわは怪我をしていただろう威力の魔法。

「な、なに??」

そんなことがさわに分かるはずもなく、急に真剣な目になったベガに焦る。

「大丈夫だから、少し目つぶって耳塞いでな」

さわを柱の影でおろして、ベガは言う。

「ガーネット嬢、今のは俺も狙ってるようにみえたが？俺はいたずらは好きだが、されるのは好きではない」

ガーネットが手に杖を持ち、顔を真っ赤にして立っていた。

「その卑しい娘をお渡しください。その女、わた、私をコケにしましたわ!!」

おそらくさっきの一件で、プライドが傷つけられたのだろう。小国とはいえ王族の一の姫だ。傳かれて育ち、自分の上に誰かに立たれたことなどないに違いなかった。

事実彼女は賢かった。先ほどさわにしたように、新しく入る候補

にいたずらをすることはあれど、あのときの言葉通り、候補として相応しくないと信じるからくるものであった。

ベガの前で媚びることもせず、対等に話して見せ、立てるべきときには男を立てる、他の候補には見られない態度に、少し目をかけていたのも事実だ。

今のガーネットにその片鱗は感じられなかった。

おそらく本能的に感じたのだろう。

女としての負けを。

彼女は青いドレスのさわをみて、逆上して氷の矢を向けた。

——まるで神話をなぞらえているかのようだな。

自らもその舞台に立っていることに自嘲して、ベガは笑った。

「ガーネット嬢、質問に答えてはいただくか？」

ガーネットは柱の裏にいるさわの方へ「卑しい娘」「殺してやる」と杖を掲げて叫んでいた。その様子に、ベガは底冷えするような冷たい視線をガーネットに向けた。

「ひっ……」

ベガの左目が血の色に染まっていた。ガーネットは後ずさりして座り込む。

「属国の中でも一番の大国からの預かり物と、甘やかしすぎたか？
そう言つて腰から剣を抜きガーネットに近づいてゆく。」

「ベガ殿」

ベガがガーネットの首に剣を突きつけたところで、大広間にいた

小さな少女、カノンが大きな鎌のようなものを持ってベガの前に降り立った。

「後宮での揉め事は私の取り仕切るところゆえ、ひいてはもらえぬか？」

そういつて右手をふつと掲げると、ガーネットの姿は廊下から消え去った。

「カノンがそういうなら仕方ないか。きちんと始末をつけろよ」
「御意」

そしてまた音もなくカノンは消えた。
ベガ鞘に剣を戻し、柱の影へと戻る。さわはぺたんと座り込んでいた。

「どうした、さわ」

大広間の、あの高いところで呼ばれた、優しい声と同じだった。

——この人は、なんでこんな声を出すの？

「ガーネットってひと、どこ行っただの？」

柱の影から、ガーネットが消えるのを見ていたのだろう。

「牢屋だ」

「なんで？」

「さわを殺そうとした」

「でも、怪我とかしてないし。私がさっき、あんな風に挑発したから……」

「あつちが先にドレス踏んだんだろう？」

「そりゃちよつとむかってきたけど、でも、そんな牢屋とか入れたかったわけじゃない」

「さわは女神の御子の祈りだから。知らなかったとはいえ、何もな

かったことには出来ない」

「でも、やだ」

「なにが？」

「私のせいで、誰かが傷つくとか、やだ」

美しい服を纏い、美しい仕草で、大広間を歩いた女性はそこにはいなかった。

そこにいるのは静かに、音もなく泣く、年相応のさわ。

「わがままかもしれないけど、もし本当に私が女神ってひとに呼ばれて、偉いつていうなら、ガーネットって人のこと許してあげて」

涙を拭いて、先ほどとは違った意味で濡れた黒い瞳をベガに向ける。

「お前は、強いな」

そう言ったベガの顔が、昨日さわをからかった口調とも、さつきまでいたずらを仕掛けて笑った声とも違って、心が騒いだ。それは「さわ」と名前を呼ぶ時の甘さに似ていた。

「いいよ。俺はお前が気に入ったから。お前がそういうなら、そうしてやる」

「あ、ありがとう」

ぱあっと顔を上げたさわに、それでもベガのいたずら心はくすぐられる。

「ただし、御礼はもらっ」

そう言っ てベガがさわに羽のように軽いキスをした。

驚いて手を振り上げたさわの気配に気づき、一瞬で距離をとって、笑いながら左の扉を指差した。

「この扉抜けたらネオがいるから、部屋につれてってもらえ」

それだけ言っ てひらひらと手を振っ てベガはその場を後にした。
顔を真っ赤にしたさわは「ううゝ」と唸っ て悔しがり、

もう絶対に隙は見せない！！

と誓っ たとか。

第13話

あの宴からすでに二週間、さわは散歩から帰ってきて扉を開けると、部屋の現状に思わず大きなため息をついた。

——とうとう部屋が荒らされたし！！

引き出しの中のドレスはズタズタに切り裂かれベッドに放り投げられているし、床の絨毯は割れた花瓶でぬれていた。

ネオもさわよりも一歩先に部屋に入って、危険はないか確認して、扉の方へと振り返る。

「さわ様、本当にほうっておいてよろしいのですか？　ベガ様やリド様にお伝えすべきでは？」

「いいいいいよ、このままで。この先も部屋とか入られても見咎めなくていいからね！」

後半の言葉を横に立つマサキに向けて言うと、護衛のマサキが「はあ」と生返事する。

ショートカットのマサキは女性ながら腕の立つ護衛としてさわについてくれている。本来なら部屋に入られないようにするのはたやすいが、さわが放っておけと言ったため、さわの部屋には誰もが勝手に入れる状態になっているのだ。

最初は些細ないたずらだった。部屋からちょっとしたものがなくなったり、歩いていると少しすそを踏まれる程度。

日を追うごとに少しずつ過激さはまし、今日はとうとう部屋を直接荒らされてしまった。

初日に目立ちすぎたさわは、身分と相まって「卑しい娘風情がガーネットを追い出した」といじめを受けていた。

あの宴の次の日、さわが目覚めたときにはガーネットは後宮のどこにもいなかった。

王に向けて魔法を放った以上、後宮には置いて置けないと国へ返されたのだ。ネオは、これは異例の処置だとさわに言った。ベガは約束を守ったのである。

あれから毎日、ベガはさわの部屋を訪れる。

初日はボードゲームの相手をしると言って、負けたさわの顔に魔法で落書きをした。

次の日はさわがずるをしてベガに勝った。逆にペンで落書きをしてやった。

次の日は絵を描いて見せろということで、似顔絵を書いてやれば「気に入った」と抱きしめられた。

話をするだけの日もあるし、花を届けに来るだけの日もある。

——慣れぬ場所で退屈しているのんだろうって心配してくれてるのかな。にあわな——い。

と、さわは思っているが、実際のところ、自分の退屈をしのぐためにさわを使っているというのが正解であった。

しかしこうしてベガが訪れているのも、嫌がらせに拍車をかけているのだった。

「でも、困ったな―部屋がこれじゃ、ベガが来たらばれちゃう」

ベガがいつも訪れる時間まであと1刻もない。さすがに絨毯を変えるのは30分では無理だ。

「では、音の間をお使いになつては？ 今日には昨日のリベンジだと仰つてましたからカードゲームでしよう？」

ネオの申し出にさわはしぶしぶ頷いた。

「あそこ一人になれるから気に入つたのに」

音の間はピアノを初めとした様々な楽器が置いてあり、自由に演奏することができる。音楽が聴けるようにソファと机もあるため、ちよつとしたカードゲームならできるだろう。

音の間に姫君たちが訪れることはほとんどない。この世界には高貴な身分の女性が楽器をたしなむ習慣がないからだ。

この2週間、さわは音の間に毎日通っている。あそこにはピアノがあるからだ。弾かないと腕が鈍ってしまう。

「じゃあマサキ、ベガに伝えに言つてくれる？ 私は先に音の間に行つて待つてゐるから、ネオは片付けよろしくね」

そう言つて、さわは一人で廊下を歩く。本当ならマサキを連れて立つて歩くべきだが、この二週間で、姫君たちのいたずら以外には危険がないことをさわは理解した。

そのいたずらとて、初日のガーネットほど過激なものではない。

すれ違った拍子に踏まれたすそは、踏まれた瞬間分からぬ程度に立ち止まつて、相手が足の力を抜いた瞬間にすつとひく。

髪飾りがなくなれば、香水を一切つけず香の控え目な生花で見事に髪を飾つて見せた。

ドレスのすそが切られていれば、いつそはさみで短くし、ミニ丈

にして着て見せた。

——この後宮、陰険だし陰湿だし、さいってー！！ 絶対に負けてやるか！！

そう決意して音の間に向かう彼女は、宴の時のように高貴に見えた。

そしてその姿は、少しずつ後宮で浸透しているのだった。

第14話

コンコンとノックをして音の間に入る。

たくさん楽器がおかれたここは、音が鳴っていないときでも音楽の気に満ちているとさわは思う。

「やっぱりここ、いいなあ」

これからもちよくちよく来ようと心に決めて、いつものように部屋の右奥に置かれたピアノに向かう。

「ベガが来るまでまだ少し時間あるし」

そう言ってピアノの前に座った。

さわはほとんどの曲をピアノで作曲する。だからこちらに来るまでは、ピアノに触らない日はなかった。音の間のピアノはとても心地よい音を奏でる。クラシックの曲を弾くと、さわは触れる音楽に興奮した。

「やっと指が動くようになった」

毎日通ううちに、やっと指が元のように動くようになった。一通り練習曲が終わると、いつものように自分が作った曲を弾こうとしてしまう自分に少し笑う。

「癖はなかなか抜けないもんね……」

今弾こうとした曲は、さわの高音を生かす、こもればの次に発表しようとしていた曲だった。今のさわの声では、あの高さは出ない。

でも、二週間も歌っていない。

この二週間はいつも、ピアノを弾くだけだった。

歌おうとして、歌うのを辞める。
その、繰り返し。

でも最近やっと、自分が話す、低くかすれる声を受け入れられるようになった。

自分がどの程度「歌えなくなっているのか」を知る良い機会かもしれない。

さわはぐつと心を決めた。

今の曲を転調させ、歌がアルトの音域になるように伴奏を変える。
話す声からして、おそらくアルト音域ならば出る。そう踏んで、
さわは息を大きく吸った。

遠い 遠いところで

あなたは今 なにをしているの

私の心はあなたの傍にいます

あなたの心はまだ 私を向いていますか

遠距離恋愛の歌のつもりで書いた曲を今歌うと、あっちの世界にいる家族のことが思い出された。

綺麗なのにたくましい母は、私がいなくても元気だろうか。

甲斐性なしだけどやさしく笑う父は、私がいなくなって泣いていないだろうか。

寂しかった。

独りで音楽に向き合って、さわはこの世界へ来て初めて、自分が「異世界」に紛れ込んだのだと実感した。

親しい人と言葉を交わすこともなく別れ、いつ帰れるかも分からない不安をずっと見ないふりをしてきたのに。

私が今ここで、ちゃんと息をしていることをだれかが彼らに伝えてくれたらいいのに、さわは歌いながらそう思った。

やはり声が伸びない。かすれていて響かない。

歌い終わってピアノの最後の音を鳴らしたさわは、ずっと腕を下ろす。

前のように歌えない。

さわはふっと自嘲してピアノのふたを閉めた。

第15話

ベガが扉を開けたのは、こみあがる涙が一筋、さわの頬を伝ったのと同時であった。

「さわ、今日は必ず勝つぞ。さつさと用意しろ。ぱーかーとやらをやるぞ！」

声がした瞬間に手のひらでごしごしと撫でる。

自分は下を向いていたし、見られたとは思わない。

「今日だって私の勝ちで終わりに決まってるじゃん。ベガも懲りないな！」

今日も顔に落書きしてやるからね！」

さわはそう言って笑った。

この世界にトランプはないし、ポーカーも存在しない。
しかしいまやベガはトランプが大のお気に入りだ。

始まりは5日ほど前、さわが、ネオやマサキにサラネストのボードゲームを教わっていたときだった。初心者のさわに合わせてくれている二人を見て、ベガは勝手に割り込んだ。そして初心者のさわを完膚なきまでに叩きのめしたのである。

「さわは弱いなあ」

ニヤニヤと笑ってボードゲームの駒でお手玉を始めたベガに、悔しさで顔を真っ赤に染めたさわが「ポーカーだったら負けないのに

！」と叫んだ。

そこからやれポーカーとはなんだ、トランプとはなんだとベガの質問攻めが始まったのだ。

トランプに興味を示したベガは、4つのマークの1から13までが書かれたカードを、すぐに人を呼んで作らせた。

さわはカードが完成すると、ポーカーの説明をしていく。

「まず一人5枚ずつ山札から配って、順番にいらぬカードを捨てて、山から捨てた枚数のカードを引く。この繰り返しで、役を作るの」

そういつて、ワンペアからツーペア、ストレートなどを強い順に並べていく。

「役には強さがあつて、これが一番強い」

さわの手にはスペードのロイヤルストレートフラッシュが揃えられていた。

「なんだ、それでは勝負は運次第か？」

思ったよりもシンプルなゲームに、ベガは期待はずれの印象を抱くが、さわはそれをみてちつつと指を顔の前で振ってみせる。

「ポーカーの真髄はワンチェンジ。もちろん運も必要。でもポーカーの面白いところはここから。それ以上に面白いのが心理戦よ！」

「心理戦？」

「そう、これはもともと賭けの一種なの。一回ごとにゲームを始める前に、おのおの『場代』を支払うの。で、カードをチェンジして、相手よりも強いと思えば掛け金を上乗せするし、相手よりも弱いと思ったら降りれば良い。でも降りた方は『場代』はとられちゃうんだよ。ほんとは他にも色々決まりがあるけど、これだけ知ってたら

ゲームは出来る」

ベガの眉がぴくつと動いた。

「あ、わかった？ つまり、相手に『自分の方が弱い』って思わせれば、自分の手札がどんなに弱くても勝てるのがこのゲームってわけ。ちなみに私の世界では、自分の考えてることを相手に読み取らせないようにすることを、このゲームからとってポーカーフェイスっていうんだよ」

そう言つて、トランプと一緒に作ってもらった擬似金を、50枚ずつさわとベガの前に置いた。

「なるほど、おもしろい」

「だから、一回一回の勝ち負けは問題じゃない。1ゲームは10回勝負ね。10回やって、コインを増やした方が最終的な勝者。上乗せの金額によつては9回負けても、そのゲームに勝つことだってあるからね！」

さわはポーカーの心理戦のヒントをちよつとだけ明かして、カードを切り始めた。

ベガは知らなかった。

さわの特技は演技、そしてそれはこのポーカーフェイスにも繋がることを。

「さあ、やるつか」

カードを配り終えて笑ったさわは、普段のベガに負けず劣らずニヤニヤと笑っていたのだった。

さわは役が揃ってなくとも、ポーカーフェイスと話術でベガを惑わしゲームを降りさせた。ベガがなかなかの役を揃えて自信満々に掛け金の上乗せすれば、そのときに限ってさわの手札はベガより強い。

ベガを手のひらで転がすように10勝負を3度、全て連戦連敗させ、ついに「やられた……」と彼に膝をつかせたのであった。

というわけで、それからベガはトランプを持ってきてはさわにリベンジを挑む日々である。

「ほら、さわ、お前からチェンジしろ！」

音の間の小さなテーブルで、ベガが慣れた手つきでカードをシャッフルし、二人の手元にカードを配る。

「はいはい」

そう言ったさわの手元には、すでにAとJのツーペアがある。

さわはスペードの9を捨て、引いたカードはスペードの3。

結果はツーペアのままだが、一瞬、ほんの一瞬だけ難しい顔をして、それでもよしっという顔をする。

ちなみにこれは演技だ。

弱い役だ、でも今回は勝負しよう！ という演技。

さわは昨日までの勝負を見ていて、ベガに観察眼があることを見抜いていた。

ベガはさわの顔の変化をよく見ている。本当に小さな変化も。

それゆえにさわのちよつとした表情にひきづられて今までは負けていた。

しかしポーカーは騙しの術。

伊達にいつも人に悪戯をして楽しんでいるわけではないらしく、裏の裏の裏まで読むものだ気づいたベガは、さわの誘いに乗らず、ゲームを降りた。

「えーなんで降りたの？」

さわは、絶対にのつてくると思ったのにと悔しがる。

「嫌な予感がした。ツーパーだったが、お前のやつ、ツーパーの中でも強そうだった」

音の間でのゲームはなかなか拮抗していた。

今日のベガは冴えていた。さわの表情や手の動きでをうまく読んで勝負に勝つこともあった。

1ゲーム目と2ゲーム目は、ベガが良い勝負をしたとはいえ、辛くもさわが勝利した。

「さわ」

ベガがさわに声をかけたのは、3ゲーム目の最後、10勝負目。

ベガがチェンジを終えて、さわがチェンジしようとしたときだった。

「なに？」

そう言いながらさわは手元のカードを三枚チェンジした。

「このゲーム、勝ったほうが負けたほうの言うことを何でも聞くつてのはどうだ？」

「えーどうせセクハラとかするんでしょー」

そう言ってベガの顔を見るが、予想に反してベガは笑っていないかった。

「なんで？」

なぜか嫌な予感がした。

ここまでの9勝負で、勝ちの数こそさわのほうが多いが、二人の手元の金は同じ。

この勝負が、ゲームの勝者を決める。

「ちょっと聞きたいことがあるだけだ。お前素直にいわなさそうだから。勝負に勝ったら何でも答えるよ」

「なんか、やな予感がするからヤダ」

「だめだ。お前だって毎回毎回負けた俺に落書きしてるんだ。勝者が罰ゲームを決めて何が悪い」

「それはベガが最初に落書きしたから！！」

「うるさい、それとこれとは関係ない。ならお前が勝ったら俺に何でも聞けばいいだろ」

「あんたに聞きたいことなんてないもん！！」

「お前の世界に帰る方法を知ってるかもしれないぞ？」

さわは目を見開いた。

「しつて、るの……？」

「いや、知らない」

しらつと答えたベガに、さわの怒りは爆発した。

「ばかー！！！！　そうゆうのは冗談にならないんだからね！！！！

良いよ、勝ったらベガの恥ずかしい過去死ぬほど聞き出して王宮中にばら撒いてやる！！！！」

「それは、了承したってことだな」

ふっと笑ったベガに、もしや自分は乗せられたのではとさわは気づく。

やっぱなしと言いかけたさわをベガが遮る。

「もう遅いぞ、ほれ」

そう言ってベガは自分の場代に持ち金を全部のせてみせた。

さわの手元には9が4枚、とジョーカーが揃っている。

自分のカードはファイブカード。負けるわけがないと思い直して、さわは冷静さを取り戻す。

「ノーモアベット」

勝負ではいつも、さわが『親』の役目をする。ただし、親も勝負が降りられるようにして、駆け引きが出来るようにはしていた。

さわの「賭けの上乗せはもう終わり」と言う言葉に、二人は一斉にカードを開く。

「……」

「おれの勝ち、だな」

ベガの手元には、スペードのロイヤルストレートフラッシュが揃っていた。

第15話（後書き）

さわの言うポーカーのルールは適当です。

カジノではもつと厳密で細かいルールがいっぱいあるそうですが、彼らがお遊びでやる分にはこの程度でいいかと。麻雀でいうドンジヤラみたいなものだと思ってください。

第16話

「うそ……」

ベガの手元を見て、さわがつぶやく。

「言っておくが、ズルはしてないからな」

そういったベガは、机の上のカードをまとめ始める。

それを見ながらさわは、悔しそうな顔をする。

「で、なに？ 私に聞きたいことって」

「人をカケにのせてまで聞きたかったことなんでしょ？ ほら、いいなよ」

半ばふてくされながら言うさわに、ベガは少しためらってみせた。しかし言葉を待つさわに仕方がないとつぶやいてこう言った。

「いや……、さっき、何を泣いてたのかと思ってな」

ベガがなんでもないように言った言葉が、さわは最初理解できなかった。少しして、さっき自分があまりの歌えなさに泣いていたのを見られたのだと気づく。

「みて、たの……？」

「涙を拭いたのが見えた」

そこでふと、さわは気づく。

歌は、聞かれたのだろうか。

あの、醜く汚い歌は。

固まってしまったさわをみて、ベガは言葉を続けた。

「いきなり新しい世界に放り込まれて、まあ俺もいろいろいたずらしてお前を困らせてるけど、さびしいか思ったりするだろう？」

さわの涙を寂しさからだと思っっているらしいベガは、神妙な顔を

する。

「お前は何かしてないのに、女神のわがままでこうしてつれてこられて、俺らの世界を救えっていわれて、これでも一応悪いと思ってるんだ」

ああ、彼は不器用なのだとさわは思った。

涙を見せた自分を、それを必至で隠そうとした自分を、彼は心配してくれたのだろう。

強がりなさわが、自分からは言わないだろうと思って、カケに乗じて言葉をかけてくれたのだろう。

だからこそ、気になった。

歌、歌は？

あなたは私の歌を聞いたの？

まるでさわの心の声が聞こえたかのようにベガは言う。

「歌ってるの、聞こえた。あれ、お前の世界の歌なんだろう？」

ああ、やはり聞かれていた。

聞かれたくなかった。

聞かれたくなかったのに。

「聞いてた、の？」

あの、醜く汚い歌を。

「ドアの向こうでちょっとだけ」

さわは心が崩れてしまうかと思った。

歌は自分の全てだった。

歌えない自分は価値がない。

この世界の人は、歌える自分を知らないから、歌えない自分も知らないから、

さわは壊れずにすんでいたのに。

歌えないことを知られたら、嫌われてしまうと思った。

気づけばさわは泣いていた。

ベガにはさわがなぜ泣いたのかが分からない。

「聞かれたくなかったのか？」

泣いた理由を言いたくないのかとベガは思った。

その言葉を、さわは歌のことだと解釈した。

「聞かれたくなかった……あんな汚い声。びつくりするくらいヘタだったでしょう？」

ベガはやっと、さわが『歌』のことを言ってるのだと気づいた。

「歌っていた歌か？ いや、綺麗だったぞ。綺麗なアルトだった。

お前は歌が上手いな」

さわははつとして顔をあげた。気づけば目の前にベガの顔がある。ソファに座って顔を覆ってなくさわのイスの前に、ベガはひざをついていた。顔を上げたさわに、すっと手を伸ばして、子供にするみたいに頭を撫でた。

「お前は自分の歌が下手だと思って泣いてたのか？」

さわはゆつくりとうなづいた。

「あんなに上手なのにか？」

なぜ、と言いたげな声音に、さわがぼつぼつと話し始める。

自分が、高音域を得意とする歌手だったこと。

こちらの世界に飛ばされたとき、自分の声を失ったこと。

低い声で話すことに慣れたと思って、今日こちらの世界に来て初めて歌ってみたこと。

「歌ってみたなら、思ったよりずっと高い声が出なくて。のども自分のじゃないみたいで、うまく操れない。音がぶれるの、ちゃんと伸びてくれないの……」

泣きながら、途切れながら話す言葉を、ベガが優しく相槌を打って聞いてくれた。

「だから、嘘つかなくていいよ。上手なわけがない」

再びうつむくさわのあごに手を掛けて、ベガはくつとさわの顔を上げる。

ベガの目は、普段左目だけが薄い赤色をしている。それが今は真っ赤だった。ベガの顔はいつになく真剣で、さわは息を呑む。

「俺は、嘘はつかない。お前の声は綺麗だった。お前は自分の前の声にプライドを持っていたんだろう。その声が出なくてもどかしいんだろう。でも、だからって今のお前の声を否定する必要はない」

目線をしっかりと合わせてベガはもう一度言った。

「お前の声は、綺麗だ。だからもう、泣くな」

ベガの言葉が思ったよりも優しく、自分が情けなくて、さわはむき出しの感情をベガにぶつけた。

「汚いよ、かすれて低い声だもん。声も前みたいに伸びない。私の声じゃない！　こんなのは私の声じゃない……！！」

さわはベガの体を押しのけて立ち上がる。そのまま走り去ろうとするさわの腕を、ベガが掴んだ。

さわの震える体から力が抜ける。ベガがさわをぎゅっと抱きしめて言った。

「ばかだな、それでも、俺が綺麗な声だって言ってるんだから、綺麗なんだよ」

ぶっきらぼうな言葉だけど、優しい、優しい言葉だった。

「私の声、へん、じゃない？」

「ああ」

「高い声が出なくても、き、らいに、ならない？」

「ああ」

私はずっと、歌えない辛さを、誰かに分かって欲しかった。前のように歌えない自分を、誰かに認めて欲しかった。歌えない自分を、嫌わないで欲しかった。

「さわ」

今まで生きてきた中で、一番優しい声で名前を呼ばれた。心をくすぐるその声に、嘘がないと分かる。

「……ありがとう」

今の声は嫌いだけど、今でも「自分の声ではない」と叫びたくなるけど、あなたが褒めてくれたから、綺麗だと言ってくれるから、頑張れる。

そう、思った。

第17話

「おい、泣き止んだか？」

腕の中で泣いていたさわがおとなしくなったのを見て、ベガはゆつくりと声をかける。

「……」

返事がないかわりに、腕に少しずつさわの体重がかかっていく。それはやがて、体を完全にベガに預ける形となった。

「泣きつかれたか」

そう言っただけでゆつくりとさわの体を横抱きにする。

そういえば前にしたときには嫌がられたな、などと不謹慎なことを思いながら、さわを見る。

ゆつくりとさわを見つめるとき、さわはいつも目を閉じている。

一度目はリードの執務室だった。

カルプが女神に関わるものだと言ったから、見極めていたのだ。自分にとって「正」か「負」どちらに傾く者なのかを。

あの女神が遣わしたものだから。

王として見極めなければならぬ。

しかし、さわはなににも知らないようだった。

頭はよいのだろう、いつも打てば響くように返事するのは心地よかった。

さわに与えられた部屋へ向かうには中庭を通らなければならない。そこにはまばらながら后候補や侍女がいる。

ベガはそこをただ歩いた。
柔らかな笑みを浮かべて。

「まあ、ベガ様」

さわの部屋をノックするとネオが顔を出す。

「音の間で眠ってしまったのでな、連れてきた」

「そうですか、呼んでいただければすぐにでも迎えに行きましたのに」

「そう遠くもないからな。構わん」

王自らがさわを運んだことに、ネオは少し違和感を感じていた。

「さわ様が、気に入られたのですか？」

手ずからさわをベッドに寝かせる姿に、ネオはそうたずねた。それに対してベガはくつと顔を歪めて笑う。

「気に入るか……むしろ逆だな」

ベガはそう言ってさわの頬を指で撫でて部屋を出て行った。

残されたのは、寝かされた拍子に目覚めたさわと、王の意味の分からない発言に戸惑うネオだった。

起き上がったさわに、ネオは目覚めたことを知って声をかける。

「今、王がこちらに連れてきてくださったのですよ。明日、御礼を

……」

「分かった」

ネオをの言葉をさえぎって、さわは寝返りを打って背中を向けた。
「今日は疲れたから、もう寝るね」

布団にもぐりこんださわに、ネオは「お休みなさいませ」と声をかけ、魔法の光を消す。

部屋は暗闇に包まれた。

気に入るの逆は、気に入らない、だ。

さわはベガの言葉が聞こえていた。

さっきまで抱きしめて優しい言葉をかけてくれた人が、私を拒絶する。

——ベガは王様だから、きっと女神の遣いである私が泣くのはよくないと思ったのだろう。

——そして「私なんか」が女神の遣いで、気に入らないと思ったのだろう。

さわは沸き起こりそんな感情にふたを閉めた。

「恋愛はしたほうがいい。悲しみも寂しさも優しさもいとしさも、恋をすれば、今知っているものよりもずっと深く深く感じられるようになるだろう」

かつて奈良橋はこういった。

「せっかくのチャンスを棒に振るのかい？」

そして今のさわをみたら、奈良橋ならばこう言うだろう。

だからふたを閉じた。

——私は弱いのです。傷付きたくないのです。

そうして目を閉じた。

——女神、あなたが本当に私を呼んだなら教えてよ。私から声を奪って、私から「私」を奪って何をしたいのですか？ 何をさせたいのですか？

さわはこちらへ来て初めて、心で女神に話しかけた。

夢の世界に落ちていく感覚と同時に、何かに引っ張られるような感覚がした。

そしてなぜだか漠然と、連れられた先に、女神がいるような気がした。

第18話（前書き）

合宿でしばらく投稿できず、すみませんでした。
今月中は毎日は無理そうですが、暇を見つけて投稿しますね。
来月からはまた連日で投稿する予定です。

第18話

「おい、いつまで寝ておる？」

さわは、気づくとあの白い空間に寝そべっていた。そして目の前には予想通り、美しい人がいる。リードはこの人が、女神だと思っていた。

「お前、何か聞きたいことがあったのではないのか？ 我も暇ではないゆえ、早々に言え」

確かに昨夜、眠る前に祈った。会える予感もしていた。

それでも美しい人を前に、さわは緊張していた。

「口が利けぬのか？ 声の属性を捻じ曲げはしたが、奪ってはいないはずだが？」

女神が顔に手を当てて、はてと不思議そうに話す言葉が、さわを一瞬のうちに覚醒させた。

「あなたが、私の声を変えたの？」

目を見開いたまま、ぼつりとつぶやいたさわに、女神は答える。

「ああ。あのままでは『世界が救えぬ』ゆえな」

「何で、声を！！」

女神の衣をつかんでさわは叫んだ。

「前のままでは不都合ゆえ」

女神は、さわの手を汚らしいもののように振り払ってそう言った。

「不都合って……私の声が？」

「そうだ。お前の声は世界の浄化には向かぬゆえ、逆の作用を付加させた」

「浄化？」

「ああ、むすめが救いを望んだ。むすめの血を引く子供たちを、我は救わねばならん」

女神は恍惚とした表情でそういった。まぶしそうな顔で空を仰ぎ見たようにも見えた。

「むすめの血？」

しかしそんな女神の様子にさわは気づかない。女神が話す言葉ひとつひとつを追うのに精一杯だ。

「そなたは無知よな」

そんなさわの問いに、女神は嘲笑を浮かべた。

「して、なんのようだ？ お前は声が出ない理由が聞きたかったのか」

さわとの問答にも飽きてきたのか、めんどくさそうに言葉を投げた。

「どうしたら、自分の世界に帰れますか？」

さわは問う。

「世界を救ったら」

女神は答える。

「声は、戻るのですか？」

さわは再び問う。

「ああ。世界が浄化されれば戻してもよい」

女神は答える。

女神の言葉はまるで抽象化されており、女神の答えは答えであつて、さわの望むものではなかった。

意を決して、さわは問う。

「世界を救うとは、いったいなんなのですか？ 浄化とは一体なんですか？ 私はなにをすればよいのですか？」

さわは問う。

「そなたは、歌えばよい。サラネストのために歡喜の歌を。ラクテ

イのために絶望の歌を」

「歌う？ この、醜い声で……？」

「そうだ。むすめが望んだ世界が、もうすぐ実現する」

女神は笑った。

笑って、笑って、狂ったように笑っていた。

ベガやリードのいる世界で、神としてあがめられる女神はそんなとき、まるで「人間」のようだった。

神々しさもない、ただ高らかに笑う女神が、さわは怖かった。怖くて怖くて、ぎゅっと目を閉じた。

そして自分自身が、あの白い空間から去ったのを感じた。

第19話

目を覚ましたさわは、夢の会話を反芻する。

こちらへ来てから初めて女神と会話をした。
世界を救えば、声を戻してやるといわれた。

「おはようございます。さわ様」

ネオがノックをして部屋へ入ってくる。

「おはようネオ」

ベッドからおりたさわに、ネオが近づいて着替えを手伝い始める。
着替えが終わるとすぐに鏡台のイスをさわのために引く。

初日の変身以来、さわは自ら化粧を施す。

この後宮で后らしく振舞うことを、さわは自分に課していた。
最初に思ったとおり、世話になるのだから、のぞまれた役割を全
うすべきだとさわは考えていたのだ。

そして昨日のベガの言葉を思い出して、一層美しい化粧を施そう
と気合を入れる。

相応しくないとされているのなら、好かれなくともせめて認め
られたい。

そう思っ て紅を引いたとき、ネオが今日の伝達事項をさわに伝え
る。

「本日は、夜に音の宴が入っております」
「音の宴？」

この国に高貴な人が楽器を弾く習慣はない。だから宴において音
楽はいつも添え物だ。バックミュージックとして流れることはあつ
ても、音が主役の宴は滅多にない。

「どうやら新しい后候補が到着するそうです。琴と歌を嗜まれる

方ですので、ベガ様が音の宴を開くと仰いました。さわ様も出席するようにとのことですわ」

「新しい人……？」

ずきりと胸が痛んだ。

「そうです。しかも今回は、ベガ様が御自ら望まれたとか。琴を嗜む歌姫で、サラネストの隅にある小国のザラの王妹でいらっしやいます。ミラクさまはベガ様と幼い頃から親しくしていらっしやいました。もしお子が出来ればまず間違いなく正妃になれるお方ですから、さわ様も親しくされるべきですわね」

歌姫。

さわはこの一言に動揺しないよう、ゆっくりと心を落ち着かせる。一度目を閉じて、それから鏡越しにネオに話しかけた。

「ミラクさまは、歌を歌われるの？」

「そうです。大層有名な方ですよ。高い声がお美しい方です。私がお目にかかったのが、ミラクさまがサラネストへの留学を終えてザラに帰られたときですので、2年前です。今はもう18になられたとか」

「そう」

ネオの話では、ミラクという姫はサラネストに幼い頃から留学していたらしい。そこでベガと親しくなり、いずれは后にと望まれていた。今回やっと叶ったのだと。

小さく、儚く、可愛らしい方だとネオは言った。歌が美しく、特に高い声が綺麗だと。

——低い声のほうがいいと言ったくせに。うそつき。

さわは思う。

まるで、許婚のようだ。

そして私はさながら、それを邪魔する嫉妬した女。

後宮を出たいと思った。

だって、ベガが愛する人と笑いあう姿を、これからずっと見るなんて、苦すぎる。

昨日自覚した恋を、私は自分で蓋をしたのに。気持ち溢れてしまふ。

「ねえネオ。私後宮以外にいないかな？」

ネオは困った顔をした。扉の向こうにいるマサキを気にしてか、少し小声になる。

「さわ様は女神に遣わされた方。ここを出るのは危ないかと」

「でも、私出たい」

さわにはこれがわがままだと分かっていた。それでも、出たいとは思わなかった。

悲壮なさわの顔に、ネオは分かりましたと答えた。

「リード様にご相談しておきます。すぐには無理ですので、今日の宴には出席なさってくださいね」

強い口調で言い切ったネオに、「わかった」とさわは答えるしかなかった。

第20話（前書き）

お久しぶりです。

またぽつぽつと書いていきますので、よろしくお願いいたします。

第20話

さわが扉を開けると、すでにほとんどの后候補が広間に座っていた。いつもなら立食の宴が、今日は違っていた。部屋の奥には小さな舞台がある。その脇にいつもの楽団が並び、向かいあうようにしてイスが並んでいた。

一目でベガの席と分かる豪華なイス。そこから少し下がったところに、装飾の美しい華奢なイスがいくつも並んでいた。后候補たちはそのイスにおとなしく座っている。

さわがそのイスに近づくと、イスの肘掛に名前が彫られているのが分かった。指定席のようだ。

さわは自分を見て、クスクスと笑う女性たちの目線で、自分が末席だと知った。

「初日といい昨日といい、ベガ様に抱えられているのを何度かお見かけしましたが、お気に入りにはなれなかったようですね」

「今日いらっしゃる方は、あなたには到底叶わぬお方。その方を後に迎えるまでの暇つぶしでいらしたんでしょ」

「そうよね、そうでなければあんな卑しい身分のむすめなど、相手になさるはずがないわ」

后候補たちはそう言ってまた顔を歪めて笑った。

初日にベガがさわをつれて宴を去ったことが、彼女たちのプライドを傷つけたらしい。

どんなに嫌がらせをされてもさわは耐えてきた。しかし、今日のいやみは効いた。

ベガがさわを特別扱いしていることはみな反感を買ったが、さわ自身もどこかで少し、誇らしく思っていたのかもしれない。

ベガの関心は、おそらく今日からミラクさまと呼ばれる方に移る

のだ。

もうさわをからかいに部屋にくることはないだろう。
花や酒を持って付き合えと夜に訪れることも、カードの相手をし
ることもないのだろう。

私の歌を褒めてくれたその声で、他の女に愛を囁くのだろう。

ぐるぐると回る思考に、さわは倒れないのが精一杯だった。
それでもイスには女性らしく座る。背は伸ばして、自分の気持ち
は表に出さない。

そうして嫌味をぶつけられながら時間が過ぎ、用意されたイスが
全て埋まると、ちょうど舞台の横の扉が開いた。

ベガは優しい顔で、隣の女性をエスコートしていた。

おそらく150センチないだろう小さな体。

大きい目に、小さな鼻、全てがバランスよく配置された。完成さ
れた顔。

真っ白な肌、赤い唇は小さく笑んでいた。

薄茶の髪はゆるくカールしており、女性を子供っぽく見せない。
小さく、可愛らしく、美しい。

ミラクを舞台まで上がらせた後、ベガは自分のイスに座った。

それを見て、ミラクは小さくお辞儀をした。

楽団が合わせて音楽を弾きだす。
ミラクがすつと息を吸い込んだ。

見た目に反した声量は確かな技術を持って広間に広がった。

さわを自分の体がゆっくりと傾ぐのを感じた。

イスから倒れないように、強く自分の体を抱きしめる。

声。

ああ。

それは。

私の声。

聞き馴染んだ美しく伸びやかに響く歌声が、さわの耳を通り抜ける。

楽しそうに、ミラクは歌う。

さわは自分の頬を涙が伝うのを我慢できなかった。

かつて失った声を、持っている人が目の前にいる。

その人は全てを持っているのに。

ベガに、愛されているのに。

私から、声まで持っていないで。

歌い終わったミラクが一礼すると、ベガは拍手を送る。

「相変わらず、見事な声だな」

そう言って立ち上がると、ミラクは舞台から降りてベガに抱きついていた。

「お久しぶりね、にいさま！」

その声も、まるで、昔のさわだった。

さわが前の世界で持っていた、声。

さわは自分が足元から消えていくような気がして。

ずっとイスから立ち上がると、ふらふらと、後ろの扉から静かに退室する。

もう何も見たくなかった。

もう何も聞きたくなかった。

ただ分かったのは、

ベガに愛されるのは、あの声を持つ彼女だということ。

女神は私から声を奪って、

彼女は私からベガを奪っていったのだということだった。

「もう、帰りたい」

さわは廊下の先の庭園で静かに座り込んでしまった。

今は宴が続いているから、ここには誰もいない。

さわは一人、静かに泣いていた。

それを見ている人が、いるとも知らずに。

第21話

庭園で座り込むさわに、ぱさりと上着がかけられた。驚いて振り向けば、そこにはリードが立っていた。

「お久しぶりです。さわ様」

そういったリードの目が、心配そうな目をしている。

「リード」

名前をつぶやけば、リードはさわの手を引いて立ち上がらせた。

「なぜ、泣いているのかを、お聞きした方がよろしいですか？」

優しい手つきで、さわの涙をぬぐう。

「うん、ありがとう。だいじょうぶ」

二週間ぶりだろうか。この人を見たのは。

リードはいつも、表情が変わらない。最初はガラスのような目だと思ったが、1日話せばその目が様々な感情をにじませるのに気づいた。

後宮に入ってからは見ることなかったそれが、今は優しい色をしている。

「ネオに、後宮から出たいと仰ったと聞きました」

さわの涙が止まるのを待って、リードはいつもの低い声で言う。

「……うん」

「どうしても、ですか？」

「うん」

頷くしかできないさわの頭にリードは手のひらを載せる。

「私は、あなたが願うなら、叶えるほかはありません」

そしてゆつくりと撫でた。

「リード、今日、優しい」

くすつとさわが笑えば、リードは頭に載せた手をさわの頭の後ろ

にずらして、抱き寄せた。

「申し訳なかったと思っています。二週間、放っておいたことを。あなたを泣かせたくはなかったのですが……」

「べつに、大丈夫だったよ？」

「大変身をなさって、他の后候補に反感を買ったと聞きました」

「そっか、リードに目立つなって言われてたのに。私目立つちゃったね。ごめん」

「そんなことはいいのです。……嫌がらせをされていたとか？」

「……っ」

「ネオが、今日やつと吐きました」

「ちょ、ネオは悪くないの！ 私が口止めしてて！」

「分かっています。でも、強がらなくてもよろしかったのです。怖かったですしょう？」

そうしてばんばんとさわの背中をやさしくたたく。

だめ、今やさしくされたら、こまる。

私、ずるいことをしそうになる。

「だいじょうぶ、だから離して」

ぐっと決意を決めて。さわは言う。腕から逃れようとものがくと、意外にも強い動作で阻まれた。

「いやです」

そう言ってリードはさわを離さない。

「昨夜、女神の声を聞けるものが、夢見であなたのことをみたそう

です。巫女を見た夢では、光がある一人の女性と話をしていたと。救いの鍵は歌にあるとも言っておりました」

急に女神の話をしだしたリードに、思わずさわの動きは止まる。

「お心当たりは？」

そう聞いたリードは、私ではなく、誰か別の人に向けて声を発していた。さわはそのことに、自分の背後から聞こえた声で気づいた。

「さわは歌が歌えるようだ。おそらくそれだろう」

さつきまで広間にいたはずの声が、リードの問に答えた。

「では、もう後宮にいる必要もございませんね」

リードの腕の中で、振り向くことも出来ずに、二人の会話を聞いていた。

「ベガ様。さわ様の歌を知ったのはいつのことです？」

「昨夜だ」

「報告が来ておりませんか？」

「今日はミラクが后候補として宮に上がって忙しかったゆえだ。他意はない」

「そうですか」

「何か言いたげだな」

「ええ、何かあれば知らせていただけるようお願いしたはずですが？」

「さわが歌えること自体、何かというほどでもなかるう？」

「ではなぜ、ミラク様が急に今日、后候補として宮に上がったのかを聞きたいですね。ミラク様がサラネストに来るのは来月では？しかも后候補としてではなかったはず」

「……」

「答えに詰まるということは、分かっていたのでしょうか。ミラク様に、さわ様の歌を聞かせるつもりだったのでは？」

「えっ……」

ちいさなさわの疑問の声は二人の耳には届かなかったらしい。

「……あいつは歌の力を見極める能力を持っている。さわの歌になにかあれば、あいつなら気づくと思ってるな」

「そのために后候補の名までくれてやるなど、やりすぎです」

「……」

言い合う二人の会話から、ベガは自分の声をミラクに聞かせるつもりなのだと分かった。

そしてそれは、今のさわには耐えがたい苦痛だった。

「やだ」

はつきりとした声で、さわは言う。

「あの人の前で歌うのは、いや」

今度こそリードの腕から逃れて、振り返ってベガに言う。

「私は、あの人の前でも、あなたのまでも、歌わない。絶対に、歌わないわ」

帰るためには歌えと女神は言ったのに。

気づけばさわはそう言って、リードの手を引いてベガの前から立ち去った。

何度か廊下を曲がり、自分の部屋へ向かおうとするさわに、リードは強い力で止めた。

「さわ様、さすがに、あなたのお部屋へ行くのは……」

ここは後宮。本来ならリードとて、入れる身ではないのだ。

「あ、ごめん！　なんか平常心が、なくなってた……」

立ち止まって、壁に背をつけたさわはため息をつく。

全然、私らしくない。ああ。もう。

「よろしければ、今夜、ここを出ましよう」

リードはさわの手のひらを取って、恭しくひざまずいた。

「今日？」

「ええ、今から」

「いいの？」

「あなたが後宮を出たいと言った一端が分かった気がしました」

「……」

「離れたいとお思いならば喜んで協力いたします」

リードは思ったより鋭い。

さわとベガとの間に何かを感じ取ってくれたのだろう。

「うん、ありがとう」

だから彼の手をとった。

だってもう言ってしまった。

ベガの前では歌わないと。

でも、帰るためには歌わないと。

なら、離れなきゃ。

彼の元から。

ふっと視界が変わって、気づけば大きな家の前に二人で立っていた。

すこしくらくらとする。

「移動術は初めてでしたね。すみません、すぐにそのめまいは治まりますので」

そう言っただけで手を取り、門を開け歩く。

「ここは私の家です。後宮ほどに整えられた場所ではありませんが、精一杯お守りしますので、ここですごしていただけますか？」

庭を抜けて家の扉を空けながら、リードはさわに問う。

扉の中は英国風の優しい空気をした家だった。

「いらつしやい」

そう言つて笑つたのは、10歳に満たないほどの小さな女の子。

「ララ、ただいま」

「おかえりなさい、お兄様」

ちよこんとドレスのすそをもつてリードにお辞儀をした。

「これは妹のララです。煩いかもしれませんが、お相手してやってください」

リードがララを抱きかかえながらさわのほうを向いていった。

さわはララの目をまっすぐに見ながら「さわです」と自己紹介する。

キラキラ目を輝かせたララは、リードにおろしてとせがんでさわの前に立った。

「ララと申します。お姉さまは綺麗な髪をしてらっしゃるのね。今度ララの髪もきれいにしてくださいますか？」

女の子の関心はいつだって美容のことだ。それは若くたって同じこと。

膝を曲げて、ララに目線を合わせて「喜んで」と答えた。

きやつきやと笑つて、ララがお部屋に案内します。と手を引いてくれた。

二階の角の部屋が、リードが用意してくれた部屋らしい。そこへつくと、ララがさわにこういった。

「今日は、ゆっくり休んでくださいとお兄様が言っていました」

兄に頼まれた仕事を見事遂行したと、セリフが言い終わったララは誇らしげだった。

「ありがとう。ララは素敵な女の子ね」

そう微笑んで、ララに淑女の礼をする。彼女を子ども扱いしないで、対等のように扱うさを、ララは大層気に入ったようだった。

「どういたしまして！ お姉さま、おやすみなさいませ」

とてとてと歩いていくその姿は愛らしかった。

さっきまで荒れていた心がずっと穏やかになった。

めげてた気持ちが少し上向いた。

小さな子と話すと元気が出る。

部屋に入ってパジャマに着替え、ベッドに入る。

ベガから離れたこの屋敷で眠るのは、すこしほっとした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9196h/>

歌を失った歌姫

2010年10月9日17時41分発行